
微瞑むように 【第三話 少女貴族は野望を抱く】

ブシイ=ナスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微瞑むよつに 【第三話 少女貴族は野望を抱く】

【Zコード】

Z2129B

【作者名】

ブシイ＝ナスカ

【あらすじ】

「この世界の裏側には、冥界があるんだよ。不思議な力を持つた冥人達の幽玄の世界さ」ボケたばあちゃんの世迷い言だとばっかり思つてたけど、なんか本当らしい。ついでに、決して交わる事の無い一つの世界の番人らしい。……村一番の、あの馬鹿が。一話完結型ライトファンタジー、第3話。

夏である。

寝苦しい夜を寝台の上でじたばたしながら越し、薄い雲に滲むような朝焼けを見るために窓の木戸を開ける。あちこちに飛んだ髪の房を櫛で梳きながら、ガリーナは大きな欠伸をした。

「今日は雨が降りそうですねえ。奥様のための服飾講座、盛況しそうです」「

ネグリジェを脱ぎ捨て、洋服だんすを開け放つと、色鮮やかな聖服がびっしりとぶら下がっているのが目に入る。丁寧に左が暖色、右に行くにつれて寒色の服に並べられていた。

聖女であるにも関わらず、ガリーナは一番左の純白と一番右の漆黒だけは着たことが無かった。正確には、取り敢えず作ってはいるものの、どういった時に着れば良いのか分からぬのだ。誰かの葬式の時は黒に近い灰色を着る。だから両方の色の名前はまだ付けていない。

なんとなく両端の色を気にかけながら、真ん中辺りの服をいくつか引っ張つてみる。

「黒は私のお葬式の時で、白は けつ

…… 真に使い道が無い。

一生着られる事も無いであろう可哀想な純白を眺めながら口を尖らせ、選んだ服に袖を通した。夏用の薄い生地と短い袖は心地が良い。同じ色のヴェールを被り、最後に大きく伸びをした。

「今日も一日、がんばろー！」

その時、彼女の声に返事をするよつて扉がかたりと音を立てた。思わず飛び上がり、「誰ですか？」と誰何するが、返事は無い。気のせいだったのだろうか。静かに扉に近付き、そつと押し開け隙間から外を垣間見る。

最初に視界に入ったものに、ガリーナは目を丸くして声をあげた。

「まあ、貴方は！」

第三話 少女貴族は野望を抱く

カイムは霧吹きを片手に、曇天を窓の向こうに眺めた。
雨が降るのか降らないのか、黒い雲の隙間から梯子のように太陽
の光が地上に降り注いでいる。

丁度その近辺、暗い色の森の向こうに、小さな尖塔が覗いていた。
よくよく目を凝らしてみると、塔は鐘楼で、小振りの鐘が可愛らし
くぶら下がっている。

一日三度鳴るはずのそれは、今朝は鳴らなかつた。

「寝坊したのかな……」

鐘の守人である聖女ガリーナは普段から寝ぼけているような少女
だが、生活では実に誠実なリズムを守つてゐるはずだつた。鐘を鳴
らし忘れる事は、殆どと言つて良いほど無い。

村人が彼女の鐘を基調に生活しているのもまた事実なのは、その
勤勉さが無意識の内に信頼されているからなのだ。

(女子なんてどうでも良いじゃん。それより、僕らの新曲聴いてく
れない?)

ふしゅ、と窓から顔を離さずに霧吹きを自分の背後に噴きかける。
霧散する塩水に、靈はきやあと叫ぶと消えてしまった。

「風邪でもひいたのかな。鐘が無いと困るんだけどなあ」
(あのさあ、独り言なのそれ? 聞いて欲しいなら聞いてあげるか
ら、大声出しなつて。一人暮らしの辛さはよく解るよ)
ふしゅ、と左隣にひと吹き。

もうすぐ昼だ。一日で一度目の鐘が鳴る時間だが、これも鳴らな
ければ様子を見に行かなくてはならない。

(はいはい、悪いのは僕らだよね。鐘が無きゃ困るもんね。早くあの女子の所に行つてみたら?)

ふしゅ。

ふしゅ。

「心配だな……」

小さく咳き、カイムは窓に身を寄せた。

彼にとつて、聖女は絶対に無くてはならない存在だ。彼女に大事があれば、彼もこの家で生きていけなくなる。ある意味で、カイムはガリーナに生かされていると言つても良い。

一刻ほど前から「キブリのように涌いて出た靈の為に費やした人差し指の労力を思いながら、曇天に輝く石造りの尖塔を見つめた。

「拝啓……お元気……ですか……」

集会所に立てられた大きな日傘の下にうつ伏せに寝転がり、何かを書いているキリアは、時折手にした小さなメモ帳を見て眉を顰めている。昼休みということで、この避暑地で少年同様にじろじろしている大人達が数人いるので、キリアは彼らに向かつて声をかけた。

「なあ、陥穿つてどういう意味だっけ?」

「ああ、それはだな、簞笥の角に足の小指をぶつけるとなんか笑っちゃうだろ。あれのこと」

「なるほど。うーん、ちょっと使えないな」

頷きながらメモ帳にその意味を記しつつ、キリアは改めて別のページを捲った。メモ帳の表紙には「マル秘単語帳」と書かれていて、恐らくガリーナから借りた冒險小説で得た知らない単語を溜め込んでいるのだろう。意外と勉強家なところのある少年に本当の意味を教えようとも思つたが、隣で寝転んでいる青年 確か牛飼いの息子だ のプライドを傷つけることになるのも面白くないので、カイムは黙つてることにした。

後ろに立つたカイムに気付き、キリアは首をひねつて右手の羽根ペンを振った。黒インクが一滴、彼の頬にはねる。

「ミミへの手紙かい？ マメじやないか」

「まあな。折角友達になつたんだし、世の中大事なのはコネだから、コネ」

唇を尖らせてそう言つ少年は、余り素直な方ではない。気に入つていた女の子が王都に帰つてしまつたことが寂しい、なんて口が裂けても言わないだろう。

「また遊びに来るだらうけどね。結局親父さんがお袋さんを連れて帰るのに失敗してゐるし、恐ろしい事にミミ自身も絶対に仲介人として成功させるまで引き下がらないって言つてたし」

「仲介つて、誰と誰の？」

「決まつてんだろ、ガリと……」

そこでキリアは口の中でもごも」と語尾を含ませ、誤魔化すように引き攣つた笑みを浮かべた。カイムはその不自然極まりない筋肉の動きを眺めていたが、やがて手を叩いた。左手に握られた霧吹きが右手に当たつてぺちんと鳴る。

「ガリーナ、そうだガリーナだよ。彼女を見なかつた？ 朝から姿を見なくて困つてるんだ」

「じゃあ森の泉かな。午後からは奥様のための服飾講座とかがあるから、すぐ帰つてくるんじゃない」

霧吹きに変な目を向けつつ、少年は仰向くなつて足を組んだ。カイムはその言葉に少し失望し、キリアの隣に座つて青い日傘の向こうの空を見上げる。

今日は曇天で日傘の意味は無いが、夏の蒸し暑さは相変わらずで、昼になると砂糖に群がる蟻のようにこの場所へやつて来る人々の条件反射は悔れないものがあつた。村民館の隣のこの広場にとは言つても何も無い村なので、広大な緑の広場の合間に家が立つているというのが正しい 林立された大きな傘は五つを数え、その下では村人達が布や寝椅子を引っ張り出して来て、昼寝をしたり本を

読んだりして暑さをしのぐ。

しかし、ただ日を避ける為なら家中に居れば良い。
この避暑地が出来たのは、今年になってからなのだ。
それというのも。

「おや、珍しい。ガリ殿がいらっしゃいませんね」

陽炎の中、皺一つ無い黒服で身を包んだ執事が悠然と姿を現す。
右手には鍬を持ち、どこかの畠で労働に従事していたに見える割には服が全く汚れていないのが不思議だった。

「うん、昼寝にしてもいつもここで鼻提灯出してるはずなんだけど。
あいつ最近、絶対にヴェール取らなくなっちゃって暑さでふらふら
してるんだ。だからこれが大好きなんだけど、今日は来てないな」
キリアは寝転がつたまま執事を見上げ、指先で隣に直立する巨大
な氷塊を突付いた。

この執事が作り出した巨大な氷が、実際に素晴らしい冷房機能を果
たしているのだ。それだけでも、氷の冥魔術を使える執事を村の一
員として迎え入れた価値があるというものだ。

「足しましょうか？」

「いやあ、今日は猛暑でもないから十分だよ。ありがとな」

少年は心地よさにだらしなく口元を緩めてへらへらと羽根ペンを
振る。黒インクが鼻の頭にはねた。

それを横目で一瞥して、カイムは膝の上で組んだ手元を見つめた。
昼夜がりになるとキリアとガリーナは毎日ここで宿題や編み物やを
しに来る常連であるし、カイム自身も時折こうして何をするでもなく
座つてぼんやりと空と蝉の声を眺めにやって来る。

ここにも来ていないとなると、一体聖女はどこにいるのだろう。
このままでは、自宅が以前の頭の弱い幽霊屋敷に逆戻りしてしまつ。
小さく嘆息した時、執事が自分を見ていることに気が付いて視線を
上げた。

「カイムスターん殿、すっかりこの村に馴染んでいますね。アルプ
一樣の元にいた貴方は、もっと無口で愛想も無かつたと記憶してい

るのですが。明朗快活、大変結構」

カイムは肩を竦めて相手を見上げた。肩に担いだ鍔と黒服と眼鏡に彩られた切れ長の瞳が似合っているのだかいのだからよく分からぬ。

「その場に合つた態度を取つていいだけですよ。そういう貴方は全く変わりませんね。アルプー様の所へ帰らなくて良いんですか？ 貴方がいないと困るでしょう」

「困るでしょうね、権謀術数に長けた者がアルプー様の元にはわたくし以外にいません。隣の領のジスティアス様との確執もそろそろ表面化する頃合でしよう。困りましたな。ははは」

「……分かつてゐるなら、何故」

「まあ、アルプー様が泣いて頼んでお給金を上げてくださるのならば帰つて差し上げる事もやぶさかではありません。牧歌的な生活といふものはそれほどまでに魅力的です」

多分もうすぐ泣いて頼んでお給金を上げてくるだろう、とカイムは思った。あの男は大して器も大きくないし、政治にも強くないし、実は小心者だし、あるのは尊大さだけだ。それが妙なカリスマとなつてゐるのは確かだが、優秀な参謀が傍にいなくては自滅するだろう。

「貴方も辞める事は無かつたろうに、それだけの実力がありながら心の底からそう思う。すると執事は真意の見えぬ笑顔を作つた。

「もう飽きた」

カイムは表情を凍らせた。隣のキリアも寝転んだまま啞然と口を開けて執事を見ている。

相手はそんな眼前の二人の様子を気に留めることもなく、「ところで」と今度は少年を見下ろした。

「ガリの聖女殿が服飾講座を開いていると仰いましたね。彼女は本当に裁縫が上手だと思いましたが、そのような事をなさつていてるですか。一昨日見た赤いフレアスカートはその講座の為でしたか」感心したように言う執事に、カイムは気を取り直して不審げな視

線を送る。

「なんでそんな事を知つてゐんですか？」

「いえ、先日彼女の家に泊まりましたから」

「…………は？」

キリアが開いた口を更に広げてかくんと大口を開けた。

事も無げに執事は続ける。

「なんでも良い布を手に入れる為のルートを知りたいとか。で、一晩中お話を」

「…………」

「いやいやああ見えてガリ殿、意外に寝首をかくタイプで……。おや、カイムスターん殿。面白い顔をなさつて、どうしました？」

「いえ……別に……」

平静を保つて呻くよつにそつ言つたカイムとは違い、キリアは硬直したまま変な声を出した。震える手で執事を指差し、

「お、お、おおお、お前、まままマジで？」

「大いにマジですが。それが何か」

しかし不思議そうな顔をする執事は、何か腹に一物抱えているのかどうかは判らない。ガリーナの家で一晩明かした事を打ち明けるのに何の後ろめたさも無い様子だった。

「ちょっと、お！？ 良いのかよ！ ていうか聖女だぞ聖女、あいつセージヨなんだぞ！」

「うん聖女だ。巫女だと言つたら怒られた」

空に視線を飛ばしてそう返しながらも、カイムは動搖していた。

聖女は十秒以上男性に触れてはいけないという決まりがあり、ガリーナ自身もそれを頑なに守っている 彼女の知らない所で度々破られてはいるのだが。

それが、ついこの間村に来たばかりの見知らぬ男と一晩過ごすなんて、彼には到底信じられなかつた。驚愕と共に、奇妙な憤懣が鎌首をもたげ始める。キリアが仰向けのまま腕を組んで挑戦的に執事を睨めつけた。寝転んでいるので膨らんだ鼻の穴が普段の倍以上見

えて、威厳も何も無い。

「ふ、ふーん。お前とガリがそんなに仲が良いなんて、知らなかつたぞ。まあ、おれも昔はよく一緒に昼寝してたけどな、あいつと」そして無理矢理口の端を上げて鼻から息を出す。競争心顕わに執事と火花を散らす少年は、撻がどうのというより単純に相手に負けた気がしているだけなのだろう。

執事は焦燥的な態度になつた一人を代わる代わる見遣ると、やがてにやりと唇を三日月形にした。

「ほう。ふむふむ。なるほどなるほど

「な、何だよ」

「貴方がたは朋友ひいばうという訳ですか、つまり「か、勝手に決めんなよ！ 誰があんな馬鹿ガリのことなんか、ばーかばーか

ばしりと一人の背後に雷が走る。カイムはまだ遠くを見ていた。ファイがお玉を振り上げてこちらに走つて来たのは、キリアと執事のぶつかる視線が臨界点を突破しかけた時だった。

「大変、大変よ！ ちょっとあんた達遊んでる場合じゃないよ、今どんでもないお客様が来て

「うるさい黙れ」

巨大な氷塊よりも冷たい一言にファイは汗だくのまま足を止め沈黙した。「名を除いたその場にいる全ての人間が、遠くを眺めたまま言葉を発した料理人の顔を慄いたように見守る。

正午が過ぎたのに鐘が鳴らない事に気付いたのは、誰もいなかつた。

カイムは己の子供じみた態度に腹を立てていた。

ガリーナが撻を軽視して異性と一夜を共にしただけだ。年頃なのだから別に目くじらを立てる事も無いだろう。それが自分の元同僚、或いは元上司だとしても全く問題は無い。一月近く前に彼女が自分

に嫌われていてると思い込んで必死に謝りに来た事だって、彼女にとっては大した事でもなかつたのだ。あの時に見せた涙さえ、些細な日常の一つだつたのだ。

(……馬鹿馬鹿しい。子供が、俺は)
もうずっと昔に決めていたはずだ。

誰にも心を寄せず、誰にも期待を持たせず、一人で生きていくと。ガリーナと自分には、同じ村の人間以上の関係は一切無い。それだけは確実だ。だから執事に對して抱くこの醜い感情は、子供の幼稚な欲と全く変わらない。

全くもって、許せない程に愚かしい。

「これはこれは、貴方様自らこんな村にいらっしゃるとは。ご連絡頂ければ歓迎会でも用意できましたのに」

だがしかし、ガリーナも軽率過ぎる。

あれ程カイムが触れるのを嫌がっていた癖に、執事となれば平気で家に上げるなんて。実際、彼は一度もガリーナの家に上がった事が無かつた。

「我が主がどうしてもこの村を見に来たいと仰つてな。元々この土地はジスティアスのもの、別に不都合はあるまい」
別に用事が無いから家に行く必要は無い。だから良いのだけれども。

ああ見えて、ガリ殿、意外に寝首をかくタイプで……。

(つまりアレだ、彼女の前で隙を見せではないといふことだ。
喉チヨップでもするんだろう。恐ろしい子。……そう、鐘だ。鐘さえあればあとはどうでもいい)

彼女が恋愛したところで村が滅びる訳がない。あんな捷は、実質上ただのお飾りに過ぎないのである。

「料理人」

今の所、問題は鐘が鳴らされていないことだ。一度でもあの旋律が響かなければ、カイムの屋敷には鬱陶しい靈達が再び溢れ出そうとする。

「料理人」

そう言えば昼の鐘も鳴らなかつた。

一体彼女はどこに行つてゐるのだ。

「料理人！」

はつと顔を上げる。

何時の間にか先導するファイに引き続きぞろぞろと歩き出した人々の中に、自分も紛れていたようだつた。目の前は副村長マーブルの家で、村中の人間が集まつている。

人々の中心にあるのは、黒塗りの莊厳な馬車。御者や護衛兵が十人近くその周囲を囲んでいる。カイムに声をかけたのは、馬車の前で冷や汗をかいているマーブルと対面している男だつた。

「君は確か、アルプー様の屋敷の料理人ではなかつたか？以前に一度、会食で見た気がする。我が主が大変に君を気に入つていたがこんな所で何を？」

年の頃は二十代後半だろうか、黒い髪はカイムと良く似ている。眠たげな萌黄色の瞳に、彼は脳裏に閃くものがあつた。

つい今しがた話題に出たばかりだったので、驚愕を隠しきれない。「ジスティアス様のバトラー殿、ご無沙汰しています。私はアルプー様の厨房を退職して、今はこの村の料亭を手伝つています。

そこの、九里金豚と言う所ですけど」

ぐいぐいと脇腹を押してくるファイに応え、渋々宣伝する。本当はバー・ババ・亭との掛け持ちなのだが。

「何？あの豚領主の料理人が退職したの？」

馬車の中から鈴のような声がした。バトラーは鷹揚に振り返り、「聞いた通りです」と返す。

「そうか、それなら」

さつと扉を開ける。中から隣の領土の主ジスティアス本人が軽い足音を立てて地面に舞い降りる様を、誰もが口を開けて凝視した。

「益々、この村は私が手に入れなくてはならないな！」

羽飾りのついた男物の帽子。高貴な紅色の下地に金糸の刺繡の上着。黒いパンツに茶色のブーツ。

小麦色の肌に宝石のような青い瞳が、その服装に実に良く似合っている。

それは領主というには余りに幼く、そして同時に極めて気高い少年だった。

カイム以外の全ての村人が息を飲む音が聞こえた。領主のイメージとかけ離れた姿が現れた所為もあるだろうが、まるで箱庭で育てられたかのように小柄で細身の肢体に凛とした大きな瞳、小生意氣に尊大な表情は余りにも都会的で、度肝を抜かれたのだ。領主ジスティアスは、まるでおどぎ話の世界から抜け出した幻想の住人のようだった。

ジスティアスは顎を上げ、啞然としている村人たちの質素な顔ぶれを端から眺めていたが、やがて鼻の辺りをむずむずさせ始める。

そして唐突に帽子に手をかけると、

「……う暑ツ！ やつてられるか馬鹿ツ！ バトラー、水水水、死ぬ！」

貴人にあるまじき乱暴さでべちんと地面に叩き付けた。肩にかかる銀色の美しい髪が解放され、僅かな風に靡いた。

もう一度村人が息を飲む。

カイムは確信した、今のは二度目の驚愕と同時に失望の合図だということを。

「お、女の子だったのか……おれ、てっきり」

「領主が女じや悪いか、子供。とにかくどこか涼しい所に入れろ！ 村の今後はそれから話す。それから料理人、何か用意しろ。ちゃんとデザートも付けてな」

マーブルはかくかく頷いてジスティアスの言葉を聞いていたが、

その呼吸の切れ端におずおずと手を挙げた。

「すいません、その、つまり。この村は、アルプー様じやなくてジスティアス様のものになると、そういう事ですか……？」

カイムは、唐突に涌いて出た話に驚いて少女のだるそうな表情を眺めた。箱入り育ちだったのだろう、初夏の暑さにさえ耐え切れないようだった。

「主はそう仰つている。とにかく早くお休み出来る場所を用意して頂きたい」

「あの、屋外で良ければすぐ涼しい所がありますけど……」「ジスティアスは何度も頷き、控え目に前に出たキリアに促す。「それでいい。死にそうだ」

「ついでに、泊まる事の出来る宿はあるだろ？」「

少女の隣のバトラーは相変わらず眠そうな目で居並ぶ兵たちを示し、その多人数に眉を顰めたマーブルは、暫く考えてからぽんと手を打った。

「あります。ちょっと古いですが、それでも宜しければ。な、カイ

ム

「は ええ？」

「ああ、構わん。感謝する」

カイムは少しの間手に持った霧吹きを見ながら考えていたが、やがて大きく頷いた。

「少し歌うかもしませんが、構いませんか？」

この国は十一の州から成り立つていてる。

それぞれには一人の長が立ち、世襲制として家名を州の名とした貴族が治め、その貴族はそのまま上の王に仕えている。そこまでがキリアの知識の限界だった。

この村の属るのは、オルドラン州。ヘイムバスク＝オルドラン＝ノム＝アルプーを領主とする、名の無いド田舎村だ。

村の隣を走る川を境とした向こうの州の名はたしかガレナ州だから、この少女の名前はなんとか＝ガレナ＝ノム＝ジスティアスなのだろう。こんな辺境の、まさに州の境界にある村だから、どちらの州に属したとしても何の不思議も無いと思っていたので、領主が変わつてもあまり驚きは無い。

帽子と上着とブーツを放り投げ、巨大な氷塊の隣の寝椅子に転がったジスティアスは、機嫌良く相好を崩した。小麦色の細い足首が顕わになり、キリアは思わず目を逸らす。

「子供、良い所があるじゃないか。なんでこんな所に氷があるのか知らないけど。なんか酔いつきてきちゃった」

はあ、とキリアは自分より少し年上であろう少女から少し離れて頭を搔く。彼女のすぐ隣ではバトラーが立膝で控えている。人々の目から解放され、二人はどこかくつろいだ顔を見せていた。領主様が休まれているから、ということで案内人のキリア以外の人間はそくさとこの場から立ち去つてしまつたのだ。つくづく胆の小さい村民性である。

尤も、ガレナ州の長を前にして、仕方ないと言えば仕方ないかもしない。

「それで、お嬢、これからどうするんですか。こんな村に用は無いでしょう、適当に新たな主人として顔見せしたらとつと帰りましょ

バトラーは随分と横柄な口調だ。仮にも自分の主人にそんな言葉を使うとは、執事とは皆こんなものなのだろうか、とキリアは九里金豚から漂つてきた良い匂いを嗅ぎながら首をかしげる。

「んー、まだ。ガリの聖女に会つ

「……なんですって？」

「だから、ガリの聖女。知つてゐるだろ」

眠たげなバトラーの瞳が、一瞬鋭い光を浮かべた気がした。

しかしすぐにジスティアスを見下ろすと、「ところでお嬢、お話をがあるのでですが」と言いつつ胸元から白い紙を取り出す。少女は横目でそれを見るなりあつと短く叫んで飛び上がつた。

「一週間前の邸内試験の点数が六十台でしたね。どういう事ですか、お嬢？」

「お前私の寝室に入つたな！ 折角ベッドの下に隠してたのに、何するんだ！」

それはこちらの台詞です、と相手は主の怒りを意にも介さず続ける。

「国民の一大義務を答えよ、その解答が『服を着ること』を捨てるのことと仲良くすること』って何ですか。そもそも一大だと言つてるでしょ、何故三つもあるんですか。更に第五問、領内で殺人を犯した者の刑罰を答えよ、解答が『だいぶ怒られる』って当たり前でしょ、うがあんたアホですか。それとも馬鹿ですか」

「か、家庭内の問題を白昼の下堂々と暴露するなんてはしたないぞ！」

「はしたないのはこの回答です。領主とも思えぬ愚答、いやある意味面白い答案ですね。ご褒美に暫くお小遣い500エンス引きです」

そんなあ、と何時の間にか正座してバトラーの言葉を受けていたジスティアスが悲しげな声を上げて俯く。皿につつすらと涙を溜め、「いじわるだ」と呟くが、答案を再び仕舞いこんだバトラーは鼻を鳴らしただけだった。

その一部始終をしつかりと見てしまつたキリアは、思わず「また

馬鹿が来た」と口に出しそうになつて慌てて息を飲み込む。

一見すると麗しい男装の美少女とそれに追従する優雅な男だが、実は二人の力関係はまるで逆なのだ。

そして何よりも、馬鹿だ。

「それから先程の衆人環視の中でのあの態度、あれは何ですか。あんたは裏山の猪ですか？ 領主なら領主らしい態度というものがあるでしょ？ 恥をかきましたよ、私は」

「うううううう」

キリアは溜息をついて嫁と小姑のよつな二人に背を向ける。見ていない聞こえていない振りをするのはなかなか大変だ。

ジスティアスという少女は、領主にしては若すぎる。バトラーは彼女の教育係を兼ねているのだろうが、それにしては言葉の端々に冷たいものを感じてしまう。あれでは領主が可哀想だ。自分なら、多分悪態を吐きながら脛を蹴つて逃げて夕飯までは帰らない。

そんな事より、問題なのは。

(アルパーのおっさんじやなくて、このアホの子が領主になるのか……。究極の選択だなあ。ていうかもつとまともな奴はいないのかこの辺)

腕を組んで顰め面で暫く考え込む。

そして、可愛いからやつぱりジスティアスで良いと結論が出た。

同じアホなら駄目男の悪食よりも将来性のある美人の方が良いに決まってる。誰だってきっとそう言うに違いない。

とても良い笑顔で顔を上げた時、何時の間にか目の前に立つていた執事と目が合つて大いに体を仰け反らせた。執事は少年の笑みを思い出し笑いだと思ったのか、眼鏡の奥から一瞥をくれただけでその脇をすり抜け、ジスティアス達の前に立つた。

「あ、豚領主の」

正座したままジスティアスが上目遣いに執事を見ると、バトラーが立ち上がって執事に相対する。余り背の高くない執事の目は、丁度バトラーの顎にくる。

先に声をかけたのはバトラーの方だった。静かな語り口に、妙な挑発が垣間見える聲音で、

「久しぶりだな、驚いたよ執事殿。アルプー様の元を遁走したと噂に聞いたが、まさかこんなところにいるとは……。出来の悪い主を持つと苦労するものだな」

「偶には静かな所で額に汗して労働に従事するのも悪くないもので、バトラー殿。貴方のような悪趣味な方にはこの平々凡々とした良さは分からぬでしが」

キリアは思わず黒服一人から離れるように一步後退りをした。

（なんだ？ この殺気は……）

見える。見えない雷が一人の背後に見える。

透明の火花が空気を陽炎のように揺らし、夏だというのに汗一つかいていない一人の周囲を城壁のように囲っている。寝椅子に正座したジスティアスは、こんな一人の対面には慣れているのか、痺れてきた足をどうにかしようともじもじしている。

奇妙な殺気に戦慄したたつた一人の少年キリアは、じくりと喉を鳴らしてその一拳手一投足を見逃すまいと瞠目した。

沈黙の中、眠そうな黒髪のバトラーが、僅かに口の端を上げ再び口火を切る。

「その若さながら執事の中の執事と呼ばれた君が、落ちたものだ」

赤茶色の長い髪を後ろで一つに束ねた執事も同じく鷹揚に微笑む。

「ええ、そのわたくしから見れば貴方は邪道なのですが。赤薔薇白薔薇どちらの学校を出ている訳でもない、執事の家系でもない、眼鏡もかけていなければ白髪でもなく髭を生やしている訳でもない。

全然駄目」

「ほう、それは牽制のつもりかね？ 懐剣を忍ばせているのは自分だけだとでも？」

「まさか。しかし、最早わたくしはあるのデブ様の執事ではない。喧伝されて余程困るのは貴方の方かと。まあ、わたくしが恐ろしいというのは理解できます。アルプー様の元から去った途端にこの

塩梅ですから、多少は優越感を感じても宜しいのでしょうか？」

「ふん、君がここにいると知っていたなら絶対に手出しさせなかつた。余計な手間が増えるからな」

バトラーは顎をしゃくつて、背後で顔を青くしてもじもじもじもじを揺らしているジスティアスを示した。「お嬢、良いですよ」と初めてそれに気付いた風に言つと、彼女は盛大に体を倒して必死に足を擦り始める。

キリアは二人の会話の断片から、どうやらこの村を一人の領主が水面下で取り合いをしていたらしいことを知る。それも、領主同士よりも、その執事たちが争いに大いに加担していたことが。

先程、執事が言つていた領主たちの確執とは、この村のことだつたのではないか。

黙つて執事を見上げるキリアに気付くと、相手は笑つて頷いてみせた。その通りだ、という事だろう。

（ということは、だ。もしかしてこのジスティアスって子、勝手にこの村を自分のものだと宣言しちゃつたって事じゃないのか？ そんな事になつたら、黙つてないぞ。あの小心者が）

脳裏に浮かぶ丸いシルエットに、キリアはかぶりを振る。春の厭な思い出が走馬灯のように乱舞し、鼻のあたりがひくついてきた。

「あのさ」

遂に耐え切れず、言葉を発してしまう。三人の視線が一斉に集まり、キリアはえへんと咳払いをした。

「この村の人間として聞いておきたいんだ。今あんたたちがしている事は、要するに領地獲得の為の戦いつてことなのか？ この村の主を決めるための」

違う、ここは私のものだ、と頬を膨らませた領主を無視し、執事はもう一度微笑を浮かべて頷く。

そして莊厳に言い放つた。

「その通り。我々二人は主に代わり、長年に渡りこの村の争奪戦を繰り広げてきました。わたくしの脅し……手腕によりアルプー様の

物ということにはなつていましたが、わたくしが辞めた事によつて両者の力のバランスが逆転しつつあるのです。そしてキリア殿、我々の名誉の為にも言つておきます。お互いが握つているお互いの弱み、それは主には全く関係がありません

「無いのかよ！！」

思わず叫んだ。それまでの沈黙と緊張感に復讐するよつて、キリアは怒号を発した。

領地の取り合いを牽制し合つていた最後の砦、それは両執事の個人的なプライバシーの問題。

笑えない。笑えないといつより、ありえない。

（しまつた、忘れてた。皆まともじやないんだつた！　くそ！）
ぐしゃぐしゃと髪をかきまわす少年を尻目に、二人の執事は徐々にヒートアップする。笑顔は崩さず、体から立ち上る陽炎は炎のように燃え盛る。

「ええ、言いませんとも。実はバトラー殿が　　趣味などとはー！」

「ああ、言わないとも。実は執事殿が　　だつたなびとはー！」

その瞬間、キリアは遂に頭のネジが飛ぶ音を聞いた。

「お前らの喧嘩のネタにするなよこの村を！　うち帰つて王国騎士団カードで対戦でもしてりやいいだろ、貸してやるからわあー…　おれリアカードだつて持つてるんだぜ、ほら！」

声を荒げてポケットに常備している遊戯用の王国騎士団カード略して王カードを地面にぶちまけると、キリアは氷の後ろに駆けていて、顔を膝に埋めた。

そして、少しだけ、泣いた。

ひんやりとした氷の冷氣が心地よい。

どれくらいそうしていただろう、蝉の声に混じつてしまりしょりと微かな音が存在していることに気付いたのは、もつ涙もすっかり乾いた頃だった。

顔を上げると、執事達の会話を聞き飽きて暇そうにしていたジス

ティアスが、氷に手をかけているのが目に入る。間近で見る青い瞳は、空よりも深い美しい色彩を放っていた。

彼女が右手を持つのはノミ。

氷の向こうでまだ会話をしている執事達をちらちらと横目で見ながら、ジスティアスは「いいなあ、仲良いなあ」と見当違ひな感想を口にする。

ぞりぞりと、氷をノミで削る手を休めることなく。

じつとりと少女を凝視するキリアは、眼前の巨大な氷が見事な程に華美な教会へと変容しつつあることに更に脱力した。上手すぎだろ！と叫んで氷に一撃を入れる事も出来たが、その気力が湧き上がりない。深い深い溜息は、きっとありもしない冥界の深遠にまで響いただろうと思ふ。

不適材不適所を地でいくような人間達である。ガリーナと共に生きてきたはずなのに、いや、共にいたからこそ、キリアは彼らの様な人種に対し過剰に反応せざるを得ない。

放つて置けば一人ですぶづぶ底なし沼に沈んでいく。一人で地図も見ずずに歩いて迷子になる。一人で思ったことをそのまま口にして逆鱗に触れて追い掛け回される。一人で食べられそうになる。一人で幽霊屋敷に行く。

だから誰かが止めねばならない。キリアが隣に立つて頭を叩いて手を引いてやらなくてはならない。

こういう人種は一人では駄目なのだ。そして逆説的に、意外と寂しがり屋だつたりするが、かと言つて馬鹿と馬鹿が手を組めば馬鹿が一乗になつて困る。水に水を足しても水だが、馬鹿に馬鹿を足せば生まれなくても良い無限の可能性が生まれてしまつ。そんな小宇宙は発生以前に滅ぶべきだ。

だからキリアは平手を振るう。

今日も明日も明後日も、忌むべき希望を摘む為に戦え、キリア！ 村の未来は君が握っている！

「どうからお前の台詞だ！！」

殆ど発作的に言葉に魔力を乗せ冥魔術をぶつける。襲い掛かる数々の小隕石を華麗な足技で全て蹴落とすと、執事は満足げに頷いた。

「ふむ、なかなか器用。強くなりましたな」

「ならざるを得ねえんだよ！ 気付けよ！ 頼むよ！」

眼窩から赤い涙を噴出させた調度その時、カイムとファイが料理の盛られた大皿を持つてやってきた。氷の異変に目を見張ったのはちよび髭の中年だけで、一人と面識のあるカイムは一瞥すらせずジスティアスの前に机を引っ張つて来る。さつき避暑に来ていた老人達が王カーデ遊んでいた、小さなテーブルだ。

「お口に合うかどうか」

言いながら、二人分の料理を少女の前に並べてゆく。ジスティアスはノミを放り投げ、それがバトラーの頬を掠つて背後の木に突き立つた事にも気付かず、心底嬉しそうにカイムの料理を見た。

「合つに決まってる！ 私はお前のファンなんだから。なあ、うちの城に来ないか？ お前の作ったスープを毎朝飲みたい。良いよね、バトラー？」

「八十点で許可しましょう」

彼は無表情でノミを引き抜き、キリアに放る。少し困つたが、キリアは持つておくことにした。

「折角ですが、私はここにいるつもりですので……」

「なんだ、つまんない」

「ワタシ、ワタシ平氣ね。毎朝愛情たっぷりスープを作つて差し上げるよ」

「そもそも八十なんて出るわけ無いじゃないか、馬鹿だなあバトラーは。あはは。そだ、光の成分についての新しい考察なら七十五点はいくかも」

「お嬢、そろそろ怒りますよ」

無視されたファイの上げた右腕は、引っ込みが付かずにぶらぶら揺れる。キリアは、美味しそうに自分の料理を口に放り込む少女から離れた所に控えたカイムが一瞬だけ執事を一瞥したのに気付いた。

いつもの困ったような、憂鬱な表情は先程から崩れていない。

(なんか、腹減ったな……。疲れ切った)

キリアも彼に負けずにアンニユイな相貌でしゃがみ込む。暑いはずなのに、氷のせいで妙に寒気がした。

心配なのは村の未来と、それに付随する自分の未来。結局は権力者の手の内で転がされるしかない小村の運命に、苛立ちを覚える。おいしーい！とジスティアスの歓喜の声とそれを嗜めるバトラーの台詞が聞こえた時だった。

遠くから微かな地鳴りが聞こえてきた。それは徐々に大きくなり、キリアがそれが馬の蹄の音だと気付いた時、疾走してきた一頭の白馬が轟音を上げてキリア達の前に急停止した。もうもうと舞う土埃に包まれた少女が咳をし、同時に料理が砂塗れで台無しになる。料理人の憎々しげな舌打ちが聞こえ、キリアは馬上の人物を見上げた。これから大いに説教される哀れな闖入者の顔を確りと見てやろうと思ったのだ。料理関係でカイムの機嫌を損ねるなどいうことになるか、彼はちゃんと知っている。

白馬に乗っていたのは、整った顔立ちを怒りに歪めた三十代半ばごろの痩身の男性だつた。水色の瞳はまっすぐに少女を捕らえ、「貴様あ、ジスティアス！ この土地を誰の物だと思っている！ 疾く去ね！」

馬上から一喝した。

「…………」

しかし誰もがその見知らぬ男性を一步引いて眺め、お互いの顔を見合わせてこそそと内緒話を始める。誰、知らない、可哀想な人、などの単語が輪を作つた領主と執事の四人組から発せられた。カイムは沈黙を保つて男を睥睨している。

慌てたのは男だ。

「何を陰険な事を……戦争でも始めたいのか、小娘。バトラー、貴様が手綱を握つていなくて何とする！ さつさと帰つて絵本でも読み聞かせてやれ、しつしつ」

「何だとこの見知らぬ中年め！ 絵本なんか偶にしか読まないぞ、失礼な！」

「ほう、やはり読むのか、そうかそうか。何なら我が都で流行りの『守銭奴ころ助大冒険』でもプレゼントしてやろうか、ジスティアス嬢？」

「むきー！ 馬鹿にするな！ どうせくれるならぬいぐるみ付きでないと貰つてなどやらん！」

同レベルの良い諂いだ。

次の瞬間、害虫でも見るような田で手を振る男の態度に、キリアはふと思いついたものがあった。
この器の小ささ、子供相手に本気になつて声を荒げる大人げのな
れ。

するとそれまで殺意をもつて男を睨んでいたカイムが、ふと表情を凍らせて口を開いた。彼はキリアと同じことを、考えていた。

「……もしかして、アルプー様、ですか？」

びく、と男は肩を震わせて青年を見下ろす。田には明らかな恐怖の色が宿っていた。

「力、カイムスターーンか。なんというか、その、まあこの間の件についてではもう怒つていないと云ふのが忘れてくれといつか……」

一呼吸置いて、カイムとキリアとジスティアスとバトラーと執事と釣られたファイの叫び声が曇天にこだました。

「何それ何それ何その異常な瘦せ方！　あんた絶対どこかで毒盛られてるよ！」

「バトラー、怖いよう！　あいつ追つ払つてよつ！」

「おお恐ろしい……きっと餓死した豚が化けているに違ひありません。お嬢、早くこの村から逃げましょう」

「やっぱり遅かったか……冥人から獣化の呪いでも受けたか……」

キリアは半トーマスほど飛び上がって腰を抜かし、ジスティアスとバトラーは寄り添つて震え上がり、カイムは眉根を寄せて苦々しく呟く。ファイは周囲の人間の絶叫に恐れをなし、カナブンのよくな速さで逃走してしまった。

困惑したように馬上で沈黙しているのは、当の本人だった。くすんだ金髪を雨の匂いのする風に揺らし、撫然とした表情と共に怯える人たちを見下ろす目は空の色で、空想小説ばかりを読んでいる少女十人に「あなたの理想の領主像は？」と聞えば九人が「この人です」答えるに違いない。

理想の領主は、やがて重々しく口を開いた。

「戦え、現実と。私はアルプー領主、オルドラン州の主であり、この村の主だ。確かに館が壊れた故の野宿が祟つて心労でほんの少しだけだけ痩せたかもしかんが」

お前こそ現実を見るオというキリアの裏返つた悲鳴を無視し、「私は確かにアルプーだ」と断言する。

それでもまだ誰も信じなかつた。ジスティアスに至つては恐怖の余りバトラーにしがみついて泣き出してしまつていて。

「怖いよつ……もう私、豚食べない。呪われたくない。怖いよつ……」

「何を言いますか、お嬢。育ち盛りに豚は必須です。大丈夫、高名

な冥魔術遣い達を雇いましょう。豚の呪いを跳ね返す呪文を唱えてもらひうのです」

「ぶつぶつ周囲で呪文を唱えられながら豚足を食るの？ なんとか魅力的だけど、ちょっとそれって不健全だとおもう」

「馬鹿おっしゃい、退廃こそ貴族の特権です。耽美主義に走るのです。民草には発想すらできない贅沢を嫌がらせのように満喫してやろうではありますか。豚足と言わず丸焼きでいきましょ」

「うん……。分かった。頑張る」

「よく仰いました。それでこそ、ガレナ州の主です」

「だから！ なんでガレナ州の領主である貴様がこの私の領地でのほほんと思春期における栄養価について語っているのかと聞いておるのだ！！」

一人きりの世界に入り浸っていた主従についに頭の血管を切られたアルプーが、馬から飛び降りて詰め寄る。既に恐怖から脱却したジスティアスは、足音高く闊歩してきたアルプーに胸を反らしながら偉そうに応えた。

「ふん、何度言えば分かるんだ元豚領主。ここには私の領土になるのだ！ だから私が主なの！ さつさと帰つて家でも直してろ！」

「小娘が、それは王国憲章統治の章第三条一項を網膜に残像が焼きつくまで眺めての台詞だろうな？ 『領土における統治の移譲に関しては、各領主が双方の合意に基づいて為すものとす』！ 貴様がぞろぞろと部下達を引き連れてここにやつて来たといつ伝令を聞いて來たと思えば、この有様だ」

ジスティアスは尊大に顎を上げたまま、バトラーを振り向いた。

「どういう意味？」

言葉を拾ったのは部下ではなく、激昂しているアルプーだった。「つまり、勝手に人様の土地を自分のものにしちゃうと駄目ってことだ。バトラー、貴様一体この子供に何を教えてきた？ こんなのが領主だと、ガレナ州の民草も苦労するわ！」

少女はその言葉に口を曲げ、再びバトラーを振り返る。アルプー

の言葉に一片の隙も見出せなかつたのだらう。彼女が縋る目で従者を見上げると、バトラーは相変わらず眠そうな目を擦りながら低い声で言った。

「しかし、実はその条文には罰則規定が御座いませんで。やつちや駄目だけど、やつちやつても別に王様からは罰は無いよという、まあ形骸化した法です」

「おい、貴様……」

アルブーは据わつた田でバトラーを睨みつける。

「知つてゐるはずだ。罰則規定が無い故に、結局領土の取り合いを始めた領主達は必ず戦争を起こすと。私は何があつても戦争だけは絶対にしない。だから大人しく手を引けと言つているのだ」

この国では、過去に何度も領土盗りの合戦が行われてきた。特にまだ王の権威が強大でなかつた中世に於いては、冥魔術も駆使した血で血を洗う戦争が何十年も続いたこともある。現在は落ち着いたものの、戦争となる火種はそこかしこに存在するのだ。特に、この村のように、領地の境界線付近の場所では。

その時、黙つて動向を見つめていたキリアが、呻くように呟く。

「すげえ。おつさんが領主に見える」

「気付くのが遅いぞ、小僧」

春の思い出がトラウマになつてゐるのはキリアだけではなく、アルブーも同じくそつあつた。少年に特に、少年の背後で未だ不審げな顔をしてゐるカイムに目を合わせないように返事をすると、引き攣つた目許で目下の敵であるジスティアスとバトラーを睨めつける。

ジスティアスは、初めて困惑したように柳眉を下げた。

「戦争なんて、私も考へていないぞ。戦いなんて嫌いだ」

「そうだろう？ ジスティアス、ならば話は簡単ではないか。いたずらに私の領土に手を出す事はやめる。平和を保つ為には、努力が必要なのだ」

珍しく優しい声音で 慣れない行為のためか、引き攣つた目許

がさらに痙攣していたが、宥めるアルプーに、ジスティアスは微笑んだ。花が咲いたように無邪気に輝く笑顔で、大きく頷く。

「うん、でもここは私の土地だつて決めたから！」

「ぶちん、とこめかみの血管が破れた。

「こおおんのクソ餓鬼がア……！ オラ来い！ 割つてやる！ いつぺん中身垂れ流しにしてやる！！」

瞬間、例の如く大人にあるまじき心の狭さで少女に掴みかかったアルプーの体が、真横に吹っ飛ぶ。背後から彼の頭に回し蹴りを叩き込んだのは、沈黙を守つていた執事だった。

「落ち着きなさいアルプー様、それじゃ代理戦争にもならぬ頂上決戦です。クライマックスはもう少し引き伸ばすのが常套でしょう」細く長い脚で宙を振り切ると、大地に伏臥した男の頭を踏みつける。その流麗な動き全てが様になっていた。

その時、完全な部外者と化してしまったキリアは、吸い込まれるように執事の姿に魅入つていた。そしてふと後ろに立つカイムに目を遣る。最近村にやつてきた人間として、執事とカイムは自然と比較の対象となるのだが、一人は余りに正反対だった。執事は都会的で冷たい美しさのある人間で、カイムはどこか朴訥とした不思議な人間だ。同じ職場で働いていた元主従の関係であるというのも興味深い。一人がガリーナと仲が良いのもまた、興味深い……。

（……あれ？ なんか）

ふと眉をひそめる。

何か。 何か、妙な気分になつた。

まるで心に小さな棘がひつかつたような。

「し、執事ッ！ 貴様、主に対してなんたる無礼な！」

盛大に鼻血を吹きながらがばつと起臥したアルプーの裏返つた声に、キリアの思考は中断する。

（まあ、いいか）

そんなことよりも、今のこの状況の方が大事だ。……大事なのだが、そろそろ面倒臭くなってきたのが本音だ。さつさと決着を付け

て貰えないだろうか。

「主？ 何のことでしょう？」

執事が片足を宙に揺らせたまま言つ。

「領主アルプー様は自己管理も出来ない無能でした。優秀な主に優秀な執事は必要ありません、優秀なその才覚を存分に生かして一人で人の二三倍働けばよろしい。無能な小物に付いてこそ、優秀な執事は輝くのです。わたくしの主、太った油じみた情けない小男アルプー様は死にました」

たかが瘦せただけでこの言い様である。アルプーは実に情けない表情で血を出し続ける鼻を抑えつつ、執事を凝視した。そんな元主からさつさと目を逸らし、執事は先程キリアがばら撒いた王力ーを拾い集め始めたバトラーを手伝つ。

領主は暫くそのしゃがみ込んだ後姿を捨てられた子犬のような目で見つめていたが、鼻血が止まると、気を取り直したように強い視線でジスティアスを振り向いた。

「とにかくだ！ ガリの聖女とこの村は、このアルプーのものだ！」
「違う、ジスティアスのものだからな！」

「何を言うか小娘が。今更のその妄言、聞き捨てならん。この村は私のものだ！」

「だつて私最初から認めてないもん、この村がお前のものだなんて。そんなの私が生まれる前の話だろ！」

「あのなあ、玩具の取り合いじゃないんだぞ！ むいぐるみ付き「守銭奴ころ助大冒険」をくれてやるからお家にお^{帰り}！」

少女と中年は火花を散らし、同時に叫んだ。 「^{バトラー}執事ツ！」

「何ですか。それより貴女、そういえば昨日また買い食いしてましたね。お小遣い下りますよ」

「わたくしは貴方の執事ではなく、皆の執事です。ひとつの大ラブより沢山のライクです。世界に一つだけの珍花よりも花粉と酸素を撒き散らす常緑樹、そんなものをわたくしは愛す」

呼ばれた二人は、拾い集めた王力ーから目を離さずに淡々と応え

る。彼らは地面に座り込んでゲームを始めてしまっている。キリアも試合の動向を眺める為、近くに寄つて観戦をしていた。余りに長く不毛な言い争いの輪廻に、すっかり飽きてしまったのだ。矢張り喧嘩は小気味良い啖呵と切り返しの応酬をしつつ、少しづつ前進しなければ聴衆の興味を惹き続けることは出来ない。子供の言い争い程度のレベルでは、特にキリアなどの百戦錬磨の人間にはちつとも面白くないのだ。

二人の主はそのつれない様子に声を失い、情けない表情で部下を見た。今更ながら口喧嘩の技術を磨かなかつた事が悔やまれる。常に注目を浴びなければ気が済まない貴族の一人にとって、今の状況は実に悲しいものだつたのだ。

そして次にやるせない視線の行く先を探し、一人輪から離れて佇んでいたカイムを見つける。

「カイムスター、絶対ここは私の土地だよね」

「カイムスター、誰がなんと言おうと私の土地だな」

一人はやや明後日の方向を眺めていたが、一人の視線を同時に受け、カイムは腕を組んだ。眉根を寄せて領主達を眺め、やがて重い口を開く。

「……それで、アルプー様のその瘦せ方の秘密は何ですか？」

「お前、マイペースにも程があるぞッ！」

二人の領主の怒号にも、カードを見つめた三人が振り返ることはなかった。

カイムは雨雲をじっと眺めて熟考していたが、ふと瞳に光を閃かせて一人に視線を向けた。さつとアルプーが顔を逸らすが、無視して続ける。

「どつちかが死ぬまで殴りあうとかどうでしょ?」

滅茶苦茶である。

「……前から思つていたが、お前、たまに人としてアレな事を言つな」

「『いい事を思いついたぞ』って顔して言わないでくれ……拒否するのがちょっと躊躇われるだろ」

思い切り顎の引けた二人を見て、カイムは聊か気分を害した。いい事を思いついたぞも何も、これ以外に万事解決する方法など無いだろうに。結局世の中の根幹は弱肉強食なのだ。まさか三角図の頂点付近に佇んでいる人間達が、そのようなことを知らないはずもない。自ら手を下す勇気さえ持たぬ主に、下の者が果たしてついて行くだろうか？

そんな彼の不満げな表情にますます顔を青くしたアルプーとジスティアスは、氣まずい沈黙と共に地面を見つめる。では、とカイムは代替案を提案した。

「代理戦争ということで、お互いの執事殿が死ぬまで殴り合ひを出来ればその血に濡れた発想から脱却して貰えまいか

「お願いしますお兄ちゃん」

深々と頭を下げられ、カイムはついに溜息を吐いた。

「じゃあもう勝手にすれば、お宅らばどつちもどつちなんですから。俺は知りませんからね」

どつちもどつち。

誰もが思つていてそれでいて敢えて言わなかつた事を、この料理人はあつさりと、それでいて氣だるげなお母さんの「ごとき口調で言

つてのけた。キリアはカードの動向を眺めながら、しつかりとサムアップでその偉業を称えた。

そもそも、とキリアの視線の先で、カードを場に捨てながら執事が小さな声で呟く。「代理戦争なんて事になる前にアルプー様を刺して逃げますから」

対面するバトラーは山から伏せられたカードを取りながら小さく返す。「まったく魔性の執事だよ。私なら鼻薬をきかせるね、君に」キリアはこくこくと頷く。少年は、既に彼らの性格を完全に把握していた。もう何も驚き畏れることなど無い。

そんな部下達のやりとりも知らず、しかも何故か村民であるカイムに怒られてしまった気がする領主達は、しゅんとした様子で行き詰った喧嘩の行方をどうすべきか模索していた。しかし、お互いの主張をお互いが譲らず、暴力無しに解決する方法など、どうにも思いつかない。ここで折れれば家名に泥を塗るとまで考えてしまっているのだ。流石にどつちもどつちな領主たちでも、その程度の冷静さと誇りは持っている。

ふと、ジスティアスが蒼い瞳を天に向け、小さく口を開けた。そして「そうだ」と呟く。

「……選挙だ」

「選挙？」

訝しげな表情で少女を見下ろし、アルプーは眉を顰める。選挙などという言葉は、王都の聖教会の坊主達がまれに使うシステムを指すもので、それ以外の人間にとつては全く身近でないものだった。貴族貧民に閑わらず。

ジスティアスは大きく頷くと、大きな瞳に相手の中年を映す。

「発想を逆転させるのだ。領主が民を選ぶのではなく、民が領主を選ぶ。この村の、十五歳以上の自己決定能力のある成人した男女に私と貴様のどちらがより領主に相応しいのか、選んで貰おうではないか。ただし即物的な煽りも賄賂も駄目だ。例えばお金あげるから私を選び、とかは禁止。自分が領主になつたらどのような政治的

メリットがこの村にあるか、演説を中心にしてジョントルに民草に訴えるのだ。どう？」

アルパーは気難しげにまじまじとジスティアスを眺めていたが、やがて不敵な笑みを唇の端に浮かべ、頷く。

「ほう、斬新な試みだな。面白い、受けて立とう！」

今この瞬間、世界初の民主政治が生まれたのはさて置き、その様子を眺めていたカイムは「へえ」と感心して独り言ちる。「死ぬまで殴る必要が無くなるんですね。回りくどいが、良いアイデアです」冷や汗を流しながら、ありがとう、と返す一人を遠目に、執事達三人はカードを次々と場に流して行った。主達には聞こえない低い声音で、手元から視線を外さず言葉を交わす。

その様子は、如何に部下である彼らが軸となつて領土の奪取について牽制しあつていたかが垣間見える、含蓄のある物言いだつた。「また奇妙な事を。領主が民におもねるような事をしても良いんでしょうかね」

「さあな。だが、面白い発想だ」

最後の一枚を投げ出すと、バトラーは立ち上がる。そして顎で中年と少女を指し示し、静かに宣言した。

「勝敗の決着はこっちに移行だ、執事殿。どちらの領主がより上手か、勝負しようではないか」

「どちらの執事が、でしょう」

にやりと笑うと、執事は眼鏡を押し上げてカードを捨てる。それから立ち上がって相手を見ると、バトラーより一回り背が低いはずが、不思議と対等の視線を交わしているような気迫があつた。

「どちらの領主が有能かなど、わたくしから見れば一目瞭然です。全く、甘いんですから。貴方達は本当に面白い」

「そつかね？ 私から見れば、君らの方が不思議だがな」

お互に笑みを浮かべ言葉を交わしながら、二人はそれぞれの領主の下へと戻つて行つた。その会話の意味を理解することの出来なかつたキリアは、ばら撒かれた自分のカードの後始末をしながら少

しだけつられて笑つてしまふ。勝負事が嫌いな少年などこの世に居ない。面白くなってきた、やはり喧嘩はこうでなくてはならない。体の血がゅつくりと温かくなつてゆくのを、地べたに座り込んだままで感じていた。

一方、この場にいるもう一人の村民であるカイムは、相変わらずどうでも良さげな表情で砂塗れになつてしまつた料理に視線を置いている。昼食を台無しにしたアルプーを叱責する機会を失したのが残念だったのだ。

「さて、」とアルプーの隣についた執事がジスティアスとその後ろに控えたバトラーを見つめながら宣言した。

「わたくしは一度退職した身。今一度かつての主の下に出戻るのは執事としては感心出来るものではございません。それは恥です。ですからわたくしは、よっぽどの事が無い限り！ そのような恥を甘んじて受け入れるつもりはございません！」

「分かつた、分かつた。給料を一割増にするから」

アルプーの情けない声に、執事は黙つて静寂を保つ。やがて一トマス吐き（注釈：トーマスおじさんが一回深呼吸するのにかかる時間）した頃、びしりとジスティアスの後ろのバトラーに人差し指を突きつけた。

「さあ、準備なさい！」

「良いだらう。頼んだぞ、料理人」

やつぱりこっちに振られるか。

面倒だったので、カイムは伝令を使うことにした。その場で目を伏せ、しばらくそのまま雨雲を運ぶ風の音を聞く。微かな耳鳴りが聞こえたころ、聞き覚えのあるあの忌まわしいボーアソプラノが風に乗つてやって来た。

『何、呼んだ？ 自棄つぱち系』

目を上げると、例の美少年合障団の団員が一人、宙に浮いている。キラキラと輝く赤い派手な服を着ていたので、丁度披露していくところだったのだろう。死の舞踊を。

カイムは曖昧に頷くと、腕を組んで少年靈を見上げた。

「領主を決める選挙をするらしいから、副村長にそう伝えてくれ。一刻で準備をするように」

『……で、そうする事で僕らにどんなメリットがあるので。さつきから館に変な兵士達がいっぱいやつて来て、彼らの接待に忙しいんだよ。両A面新曲が十枚ほど溜まってるから、全部披露するのさえ夕方までかかるんだよ?』

少年は大仰に溜息をつくと、宙でくるりと一回転し、頭の上で腕を組むアオリのポーズをする。カイムは一瞬、相手を冥魔術で吹き消すイメージを脳裏に浮かべたが、そんなことはおぐびにも出れず続けた。

「どうせ副村長は選挙にかこつけた祭にするだろ。こっちでリサイタルでもやつたら? ガリーナが鐘を鳴らすまでの間だから」

少年靈は少し黙つたが、やがてくすくすと笑みをこぼす。白魚の

ような手でカイムの髪を撫でると、風に乗つて来た道を翻つてゆく。

『オッケー! こりや凄いや、数十年ぶりのフェスティバルだ!

シーラも動員して、生きてる奴らを死ぬほど虜にしちゃうぞーるるらららーらー』

生死の境を彷徨うだらうな、何人かは。しかし、リサイタルが始まると前にガリーナを見つければ問題ない。馬鹿と鋏は使い様である。この場合、馬鹿というのがガリーナと幽靈のどちらを指しているのか、カイム自身にも分かりかねたが。

ふと首を巡らせると、その場に居た全員が凍つたようにカイムを凝視していた。紙のように白い顔で 幽靈屋敷を僅かながらでも知つている執事だけは平然としていたが 、驚愕とも恐怖ともつかぬ表情をしているので、カイムは困ったように笑つてみせる。

「今の、俺の従兄弟の友達の息子の級友です」

誰一人信じなかつた。

信じなかつたが、それ以上の追求を避けた。

何故カイムの従兄弟の友達の息子の級友が半透明なのだと、宙

に浮かんでいたのかとか、突然現れたのかとか、生きてる奴らをどうのとはどういう事かとか、聞きたい事は沢山あつたに違いない。けれど、どういう答えが返ってきても安堵は得られそうにないことは、カイムの何時ものよつに優しげな笑顔を見ていれば自ずと解るものだ。本能というものは誰にでも存在するのだから。

「冥獣召喚士だ……」

唖然としながらも目を輝かせたジスティアスを、バトラーが面倒臭そうな瞳で見下ろしたのが視界の隅に映る。カイムは踵を返してその場を後にした。ガリーナ探索の続きをためだ。

少年靈が、たまたまガリーナの鐘の「封」が遅れた為に現れいることの説明はするつもりはない。あんなのと友達だと思われるのが不本意だったからだが、既にそれは手遅れだということに気付くことも無かつた。

カイムの予測通り、副村長は選挙を祭に昇華させるつもりらしい。女性は炊き出しに走り回り、若衆は屋台や舞台を急いでこしらえ、隣町に花火を買いに馬まで走らせる。先程の休憩所では楽団俱楽部の老人達がこの地方に伝わる古い楽器の手入れに余念が無いし、外に居ない者は蚤の市に出す商品を家中引つ繰り返して探している。ふと大通りを見ると、大きな垂れ幕が派手な旗と共に風に揺れていた。「第一回領主決定選挙祭」とやたらと丸い字で書いてある。

第一回以降があるかどうかは分からぬ。カイムがこの村に来てから何度も祭をやつたが、いつも「第一回大工の嫁双子出産祝い祭」や「第一回台風の日が村に滞在祭」や「第一回太陽が眩しかったから祭」などばかりなので、常に第一回を冠詞として使うのが慣例なのだろう。第一回台風の日が村に滞在祭は、その名の通り台風の日が村の真上で風が凧いだ時に行つたのだが、当然数時間で台風の日は移動する訳で、大風に煽られながらも何故か皆樂しそうだつた。ガリーナなどはキリアと一緒になつてぴょんぴょん飛び跳ね、風の

せいでいつもより遠くに飛べます素敵ですとかなんとか言っていた。

そんなに好きならいつでも台風を起こしてやるの!」。

そういう言葉が喉まで出掛かつて、カイムは慌てて引き攣つた笑顔を浮かべたものだ。

ともかく、この村の祭好きは異常である。若者は強制参加なのだ。当然、カイムもまた。

「ガリーナを探しに行くなって言つたのに……」

溜息混じりに言いながら、金槌を板に叩きつける。元々手先は器用なので、彼の作る屋台は他のものよりもこじれいに出来上がりつつあった。当の領主たち本人は、控え室で舞台が出来上がるまで出番を待つていて。何の出番だか知らないが。

「子供じゃあるまいし、放つといても出でへるよ。なんでそんなに会いたいんだよ?」

少し離れた木陰に座つたキリアが、さつきから握っているノミを弄びながら尋ねてくる。カイムが手を差し出すと、持っていた釘を投げて寄越した。

「説明すれば長くなるけどね、寺院の鐘の音が鳴らないと幽靈がひどい歌を歌つて皆が辛い目に合つんだ」

「端的だな」

少年はぽつりと呟くと、別に困つた顔もせずに再びノミを弄りだす。「それより」と遠慮がちに言つた。

「前から聞いたかったんだけど。兄ちゃん、冥魔術が使えるよな?」

かん、と釘を最奥まで穿ち、カイムは手を休めた。キリアは続ける。

「さつきもそうだ、あれが冥魔だとは思えないし、召喚したのかどうかも分からないけど……とにかく、兄ちゃんはあのオカマみたいなキモイ幽霊を呼んだ。瞬時にだ。これってどういう冥魔術?」

「王都には」

言葉を紡ぎつつ、紡ぐ言葉を選ぶ。屋台の強度を確かめるために何度も釘の繋ぎ目を押してみるが、びくともしない。

「冥魔術を使える人間なんてざらにいるからね。俺もちょっと齧つただけなんだよ、風の冥魔術を。あの幽霊も風に声みたいなものを乗せて呼び寄せた」

「発動経路は？ オロー式？ ゾルデア式？」

「……」

発動経路。なんだそれは？ 聞いた事があるような、無いような。冥魔術を使うには、常世から現世に「力の源」を引きずり出す際に、自分を通してある種の力場転換装置を組み込まなくてはならないと聞いたことがある。そのやり方が数通りあって、それぞれに名前が付けられているということだろうか。多分、そうだ。

カイムは少し笑うと、キリアに尋ねた。

「君は？」

「おれはオロー式」

「じゃあ、違う方じゃないかな」

キリアはノミに視線を落とし、考え込むような間を持つてから、再びカイムの黒い瞳を見つめる。

「嘘だ」

「……嘘？」

「ゾルデア式は書式を介して冥府の力をこちらに持ち出す、『召喚式』の発動経路だ。一方で、オロー式は自らの直視や发声で発動させる。執事の兄ちゃんもおれも、オロー式だ。兄ちゃんは書式をいつ描いた？ 描いてないよな。アルプーの館を壊した時だって、何も見てなかつた。アルプーを見ていた。けど、発動した風の冥魔術は、兄ちゃんの見ていない館の外殻に発生してた」

カイムは呆気に取られて少年の厳しい顔を凝視した。

まさか、こんな辺鄙な村に、これほどの知識を持つ少年が存在するとは。

「兄ちゃんのは、ゾルデア式でもオロー式でもない。だとすれば、後は……『クラビト式』しか無いじゃないか」

「クラビト式？」

そんなものまであるのか。

驚いたカイムの表情に、キリアも徐々に驚いた表情を作る。そして深く溜息をつくと、首を振つて座り込んでいた足を崩した。

「あのさあ、本気で知らないの？ ちょっと齧つたって言つてたろ。ゾルデア式もオロー式もクラビト式も、子供がご飯を食べるためにはスプーンの使い方を教わるようなもんなんだぜ。じゃあ、クラビト式を使える人間が存在しないことも知らないの？」

「……ごめん、ぜんぜん知らなかつた。子供の頃からなんとなく使えたから、特に勉強もせずにそのまま今まで生きてきたんだ。発動経路っていうのも、よく知らない」

「滅茶苦茶だなあ」

心底呆れたようにキリアは笑い、曇天を仰いだ。

つまり少年は、「お前のような冥魔術の使い方をする人間は存在しない」と言うのだ。

カイムはどう応えようかと迷ひ。じつ返事をしたところで、キリアの発見したカイムの中の異端は揺るがしそうが無い。困つて屋台に視線を戻した時、キリアが、

「兄ちゃんて、たまにガリに似てるな」

と言つた。

「それは無い」

木目のさくれを削りながら、きつぱりと断言する。

あんなのと友達だと思われるのは別に気にしないが、あんなのと同類だと思われるのにはやつぱり少しだけ困る。自分は色に変な名前を付けないし、台風の日にぴょんぴょん飛び跳ねないし、前後不覚に陥つて人を木槌で殴らないし、幽霊の歌を良いと思うこともない。異性を気安く家にも呼ばないし、一晩過ごすことも無い。ばき、と音がした。

「あーあ」

握り締めていた屋台の脚が折れたのだ。少年の呆れた嘆息に、カイムは再び困惑したような笑みを乗せ、同じく曇天を仰いだ。

「ゾルデア式つていうのは、オロー式に出来ないことをカバーする感じかな。オロー式では、まず術者本人が直視出来てホップ、対象物を手に取るように把握出来てステップ、かつ呪文を发声してジャンプつて感じ。これだと目に見えない遠距離では一切冥魔術は発動出来ないし、術 자체も刹那的だ。それを補うのがゾルデア式。声と違つて書式は形として残るから、継続的な術を使用するのに効果的だ。例えば、植木の花の鮮度を長く保つとか、嫌な奴に風邪をひかせるとか」

キリアはノミで地面を掘り、図形を描きながら説明を続ける。ぐるぐると屋台の脚に包帯を巻きつけ、固定しながら、カイムは上目遣いに少年の弁舌に頷いた。

「へえ。じゃあ、ゾルデア式も勉強しておくと便利なのかな」「うーん、便利だけどね。右利き左利きみたいな癖で、最初にどちらかを習得した人間はもう一方を習得するのは難しいみたいだ。多少は使えるらしいけど、おれは取り敢えずオロー式一直線」

少年は得意げになつて話し続ける。年上で何でも出来るような雰囲気のあつたカイムが、真剣に自分の教授に頷くのが妙に心地良いのだ。

あれほど強力な風の冥魔術を使うカイムが、本当に冥魔術について何一つ知らない事は信じられないが、彼はキリアのつたない説明にもいちいち感心したように頷き、時々考えこむように手に收まつた屋台の脚の傷痕を見つめる。一応、折れた脚は地面に立つまでに回復はしたが、傍目に見てどうにも痛々しい。

「で、クラビト式つてのは、学者先生のつけた单なる烙印」「と言つうと？」

一呼吸置いて、勿体ぶる調子で少年は続ける。

「本家本元の冥人が使う発動経路のこと。誰も冥人を見たことが無

い癖に、概念だけは作っておこうとした。つまり、他の一つと違つて、『発動経路』が『皆無』

「……力場の転換だかを行わずに、冥界の力をこの世界に引きずり出すということ?」

そういうことだ。

そもそも、冥魔術の源自体、どこからやつて来るのか誰も知らない。聖教会は冥界を満たす力だと言つし、冥魔術協会は冥府を形成する精神だと言つてゐる。とにかく、「どこか」から自らを通して外に力を引きずり出すという事だけは分かつていた。

人間は瑕疵かしある存在ゆえに力を引きずり出す際に手順が必要であるが、冥界、或いは冥府に存在する冥人は、魔性の存在ゆえに手順を必要とせずいくらでも力を引き出せるというのが学者の机上の理論だ。冥魔術協会に至つては、冥人そのものが冥府と同義であり、力そのものが力を発するのにどのような手順が必要だらうか、とまで主張している。

「それがクラビト式か。それじゃ瑕疵ある存在である人間はオロー式かゾルデア式に頼るしか無いんだね」

先程から感心したように何度も頷くカイムの本心は、見えてこない。自分がクラビト式かもしれないといつことに対して、何の言及もしないのだ。アルプーの館を壊した時と同じように。

キリアは鎌をかけるつもりで、桜の樹の幹に背を預けながら言った。

「冥人つてのは、お菓子を食べたことが無いのかね?」「はあ?」

カイムがなんとも形容しがたい不思議な表情をした時、背後の草むらががさがさと蠢いた。ぎょっとして一人が振り向くと、両手一杯に砂糖菓子を抱えたジスティアスが、周囲を伺うように顔を出した。

彼女は啞然と見下ろしてゐる一人の村民がいることに気付くと、一瞬顔をこわばらせ、

「わ……我輩は犬であるわん」

「そうですか。夏場にお菓子をかかえて地面を這うと蟻がたかりますよ」

「うぎやつ！ わ、私のおやつがー！」

カイムの落ち着いた一言に草むらから飛び出す。菓子ビリビリか体中蟻だらけだった。

少女は泣く泣く砂糖菓子を愚蟻にくれてやると、きつと一人を睥睨した。

「我輩はジスティアスじやないからな！ お前たちは夏の白昼夢に踊らされているのだわん。我輩は犬なのだわん」

「そうですか。バトラー殿に黙つて一人で外を徘徊すると、後で怒られますよ。犬っこい」

「犬っこ……。そ、それでいいのだ。バトラーには内緒にするのだ、我輩はすぐに帰るのだから。わん」

相変わらず言葉の端々に何かが漏れている気がする青年に、釈然としない表情で視線を投げかけると、ジスティアスは再び草むらに戻ろうとした。キリアは「何で徘徊してるんすか？」と何気なく尋ねた。

少女はその言葉に振り返ると、思案にくれる相貌でしばし佇む。秘密を暴露しようかしまいが、迷つている様子は明らかである。

カイムがそつとキリアに囁いた。

「なんでって、犬だからでしょ？」

「兄ちゃん、前から言いたい事があつたんだけど、あんた絡みにくいんだよ」

キリアは眉間に皺を寄せ、唸るように返す。

この青年は時折、馬鹿にしてるのか冗談を言つているのか自棄になつてゐるのか、判別がつかないことがある。馬鹿一邊倒のガリーナに比べると、相手をするのが難しい。この辺は自分の修行不足であると思い、キリアは気合を入れなおした。

「あのな。バトラーには秘密だぞ」

ジスティアスは躊躇いがちに話しかけ始めた。まだ蟻が必死に服にしがみついている。そつちの方が気になつて仕方ないが、仮にも貴族である少女の服を掃うことなど出来ない。

「こ」の間、「うちの館で保護した迷子が、ガリの聖女について話したんだ。それで興味を持つてパンフレットとか取り寄せて、色々調べて、面白そぞだから逢いたいと思って。世界の均衡を守るという重大な責務を負つておる聖女だろう? お互い責任ある立場、領主である私と話も合うかなあつて」

「合わないと思いますよ」

「合わないと思うよ」

同時に二人に応えられ、ジスティアスは一瞬顎を引いた。

「だ、だつて……歳もそんなに離れてないつて聞くし、聖女だから淑やかで秘密を守ってくれそうだし、色々話してみたいことが」キリアとカイムは顔を見合せた。

「淑やかかなあ?」

「聞くなよ、否定する労力さえ起きない」

「でも名前負けしておるよな。聖女つて」

「少なくとも聖なる女ではないな」

「責務も負つてゐるのかなあ?」

「鐘鳴らして彼氏作らない」とぐらりいやない? 守つておるの

「……どつちも破られたしね」

「……ああ、そういうば

「そもそも木槌で暴れかねない」

「十一連撃を習得中らしいよ」

二人はジスティアスに視線を戻した。

「合わないと思いますよ」

「合わないと思うよ」

再び同時に応えられて、ジスティアスは口を噤んだ。否定された事に気分を害したのか、頬を膨らませ、青い瞳を潤ませて地面の砂糖菓子に視線を落とす。「逢つてみなきや分からぬもん」と呟い

て、蟻がせつせと食料を解体するのを凝視し始めた。

(ああ、選挙じいさんよ。本郷にじいさんじだ)

きっと凄まじい接戦になるだろう、とキリアは領主の様子を眺め

てせんやつと考えた。

び出したのだ。

「お嬢、大人しく控え室の壁にらぐがきしているかと思えば、こんなところに！ 勝手に出ちや駄目だつて言つたでしょ、あんた領主なんですから。それからあの絵、なんか死んだばあさんが見えるとか言って老人達が拝み始めてますよ。変なもん描いて人心を惑わせるのはやめなさい！」

ぎよつとした表情で後ろ退つたジスティアスは、柳眉を下げて現れた部下を見上げる。

「どうして！」が分かつたんだ？ 誰にも見られなかつたのに……」

「蟻が葬列の」とく脈々と控え室からここまで大河を作つてますからね。しかも途中で駄菓子屋に寄つてる。あんた、控え室のお菓子を食べ歩きながら駄菓子屋でまたしても買い食いしてここまで来てでしょう」

萌黄色の瞳はあくまで冷静で、言葉だけが激しい。主の襟首を掴むと、頭から体にかけて何度もぱんぱんと叩き始める。お仕置きか、と思いきや、彼女の体にたかつた蟻を払い落としているのだった。ばらばらと大地に落下していく蟻に目もくれず、ジスティアスは相手を見上げて小さな声で言った。

「あの……お小遣い、下げるやないよね？ 買い食いじゃなくて、蟻さんが可哀想だつたから恵んであげようと思つたの」

バトラーは鼻を鳴らすと、「何故」と返した。

「お小遣いが下がらないと考えるのか不思議ですね。あんたのその優しさがお小遣いを奪うのです。さあ、戻りましょう。選挙をやる」と言い出したのはあんたでしょう。

ר' יונתן ר' יונה ר' יונתן ר' יונה

いじわるだ、と咳き、またしても目にいっぱい涙を溜めてしまった少女を見て、キリアは不憫でならなくなつた。実際、彼女程度の馬鹿ぶりなら、ガリーナの足元にも及ばない。ガリーナ以上の馬鹿がこの世界に存在するのかも疑問だ。ガリーナは馬鹿の権威なのだ。それなのに、ガリーナは罰を受けることなく、ジスティアスは厳しい罰　お小遣いを更に下げるなんて、拷問だ　を受けている。

これが、平民と責務ある貴族の差なのだろうか。

それともガリーナと比較すること自体に無理があるのだろうか。「可哀想に。話し相手が欲しかつただけでしょ、犬の振りまでして」

カイムがぽつりと咳いた。バトラーは振り返ると、目を擦り、青年を正面から睨みつける。

「犬の振り？」

「ち、違う！　守銭奴ころ助の真似して遊んでたんだ！」

青ざめて首を振る少女に視線を戻すことなく、バトラーはカイムに告げた。

「ジスティアス家において、お嬢の教育方針は私に一任されている。話し相手になら私がなる。口を出さないで貰おう」

「出していませんよ。俺もアルプー様の元に居た人間だ、ジスティアス家の事情はそれなりに知っている。ただ、ガリの聖女がジスティアス様に逢いたがつてるので、無礼を承知で引き合させようとした俺が誘つたんです。非難なら俺が受けるべきですが」

キリアは驚いて青年の顔を見上げた。少女も吃驚して目を見開いている。

少女を庇おうとしているのか　それなら、とキリアも追従するような笑みを浮かべて言った。

「お菓子もおれがあげたんだ。お菓子以上に立派な贈り物つて思い浮かばなかつたから。おれ、ガキだし」

輝かんばかりの笑顔で言うと、カイムもキリアを一瞥した。その目が一瞬だけ笑みを含んだ気がして、不思議と気分が良くなる。

「本当ですか、お嬢？」

ジスティアスは困惑したように一人を見つめていたが、やがて躊躇いがちに頷いた。

「判りました。これは、身分を弁えない無礼な行いです。貴族たる者が悪意ある者に襲われかねない、危険な状況を作ったのですから。彼らの罪状は」

「やめろ、私が彼らの行いを許可したの！ 彼らに罪は無い！」

「ならば、やはりあんたに責任があるわけですね」

「……それは、そのう……あのう……」

バトラーは溜息をつくと、呆れたように周囲を見回した。「まあ、良いでしょ。カイムスター、そしてお嬢のお互いに問題があつたとして、不問とします」

キリアはその言葉を聞いて、脇からどつと汗が噴出すのを感じた。自覚のないままに緊張していたらしい。それはそうだろう、領主誘拐未遂という罪状さえ、無理矢理にでもこじつける事の出来る状況だったのだ。安堵に息を吐くと、隣の青年が相変わらず平然としているのが妙に頬もしく見えた。

(やつぱり、大人だなあ。兄ちゃんは)

彼は何の躊躇も安堵も見せず、真っ直ぐに黒い瞳でバトラーの視線を受けている。すると、萌黄色の瞳の男はカイムの前に立ち、耳元で囁いた。

「嘘はもつと上手に吐くものだ、料理人。冥獣を召喚した時もな」「勘違いされていますね。あれは冥獣ではありません、ただの幽霊です。俺に冥獣を召喚する力はありませんよ。穴が開いていないと、召喚は不可能でしょう」

バトラーはカイムの肩越しに家と木々を眺めたまま、小さく笑つた。そのまま踵を返すと、来た道を引き返してゆく。蟻の葬列を辿り、控え室へと戻るのだろう。その後姿を追いかながら、ジスティアスは一瞬こちらを振り返り、再び何も言わずにバトラーの後についていった。

その姿が木の陰に隠れ家々の向こうに消えてから、ようやくキリアは盛大な溜息をついた。

「寿命縮んだぜ……十日ほど」

考え込むように二人の去った方向を凝視していたカイムも、その言葉で笑みを見せた。

「キリア、なかなか男らしいじゃないか。そういうところを大事にしていけば、きっとモテるぞ」

「まじで？ 超大事にする、超育む。じゃあ、兄ちゃんもモテるだろうな」

「はは、駄目だね。いくら好かれても自分が好きにならなきゃ意味が無い。それに、例え好き合つても」

「ても？」

カイムはもう一度笑うと、「なんでもない」と呟いた。人の好い笑顔でキリアの頭を軽く叩くと、もう一台の屋台を作るために金槌に手を伸ばした。キリアはその様子を眺めていたが、今度は手伝うためにポケットの中をまさぐった。出てきたのは、ノミ一本と釘數本だった。諦めて再び木に背を預けて座り込む。

曇天の下、鳥の無く声と、楽団俱楽部の練習と、カイム同様工事に勤しんでいる人間たちの楽しげな掛け声が響いてくる。かすかに雨の匂いが強くなってきた。

「あの子さ、可哀想だな」と呟く。

「犬つころ？」

「……もう忘れてやれよ」

残酷な大人め。

ますます不憫になつてきて、キリアは厚い雲の流れを見上げた。蝉の声はいつしか止んでいる。それでも暑さは変わらない。

「アホの子かと思つてたけど、アホなりに結構頑張ってるんじゃない？ それなのに、領主だからつて事であんなに厳しく躰けられた。きっと本当は領主に向いてないんだよ、あの子の生来の気質が。まだみんなに子供なのに」

キリアより年上のはずだつたが、それよりも幼く見える。キリア

自身が同年代の少年よりも大人びている所為もあるのだろうけれど。

「犬つ……あの子はね、妾の子なんだ」

金槌の合間に聞こえた声に、キリアは視線を地上に戻した。しゃがみこんで背を向けているカイムの腕は、休むことなく釘を木板に穿っている。

「妾の子？」

「妾という言い方が正しいかどうか、誰にも解らないけどね。確かにあの子は領主にしては幼すぎる、だから実権は祖父である前領主が握っていると聞いていたけれど、どうも違うみたいだ。あのバトラーが実質的には統治の大部分を握っているんだろう」

それは一介の小村の子供であるキリアが知る由もない話だつた。時折忘れかけるが、カイムは曲りなりにもかつてアルプーの厨房を預かっていた重要な地位の人間なのだ。民草の耳には届かない上流階級の噂話も、好きなだけ仕入れることが出来ただろう。

キリアが黙つて聞いているのを確認したのか、彼は続けた。

「前領主には一人息子がいたんだ。けれどこれが放蕩だかで、公の場には殆ど現れない。最初は病弱だつたから存在を秘匿されていたと聞いたけど、そこらじゅうで遊び呆けて、仕舞いには死んだとも言われている。とにかく、問題のある一人息子だつた。普通は子を沢山生す貴族だけど、前ジスティアス領主は一途な男で、天逝した妻以外に新しい妻を娶ろうとしなかつた。だから血の繋がる跡継ぎが、この息子しかいなかつたんだよ」

ところが、と息を吐くように言つ。

「その跡継ぎが死んじゃうだろ？ そうすると、お家騒動が勃発するわけだよ。領主の座を狙つてゐる親族一同は沢山いるし、どいつもこいつも贅に人生を捧げたろくな人間じゃない。前ジスティアス領主は困り果ててしまつた。血は何よりも大切なものだし、このままだと統治問題にも関わるから。するとある日、死んだ息子がどこ馬の骨とも知れない女に産ませた子が孤児院にいるという話が飛

び込んできた。話半分に会いに行くと、その子はまだ五、六歳で、下町の子供たちと一緒になつていたずらをするやんちゃな子供だった。とても貴族の血を引いているとは思えなかつたが、その子はジステイアス家の紋章を持っていたんだ。それで、子供はすぐに引き取られ、領主たるべく教育を受けつつ、傀儡として祭り上げられた。それが、彼女だよ」

キリアは 反吐が出そうになるのを押し戻すのに必死だつた。
お家騒動？ 自分勝手に子供を作つて、自分勝手に政治材料として使う？ 何も知らない子供は、突然友達と引き離されて？

「貴族様つていうのは、人の人生を何だと思つてるんだ！ とんでもねえ奴らだ！」

「ガリーナは？」

小さな言葉に、キリアは一瞬耳を疑つた。カイムを見ると、相変わらず背を向けて屋台を組み立てている。もう殆ど出来上がつていた。

「ガリが、何だつて？」

「聖女のシステムさ。彼女は一生家族を持つ事を許されない。志願して聖女になつたの？ それとも、あらかじめ決まつっていたの？」

キリアは息を飲み込んだ。

聖女になる者は、生まれる前から決まつている。生まれながらにして聖女なのだ。

でも、無理矢理聖女にさせている訳では ある。

聖女がいなくなれば、村が滅びる、だからそれは仕方が 無い。

第一、彼女は聖女が辛いだなんて一言も言つていらない。それどころか、村の誰よりも一番幸せそうに毎日暮らしている。聖女がガリーナを束縛する足枷になり得ると思ったことはあるが、彼女は足枷だと感じたことは無いはずだ。多分、そうだ。そうに違ひない。そう思つて生きてきた。村中の誰もが。

「色々あるんだよ。世の中には」

そう呟いたカイムの言葉は、何よりも強くキリアの心を揺らした。

一台目の屋台は、程なくして完成する。

カイムが立ち上がりつてその強度を確かめている時、ファイが丸いお腹を突き出して忙しなげに食材を運んでいる姿が遠くに見えた。ぱん、と小さな花火が空に上がる。そろそろ選挙祭が始まる頃合だつた。

青年は屋台から離れると、金槌で自分の肩を軽く叩きながら主会場に向かつたファイの元へと歩き出した。

正気に戻ったキリアは、慌ててその後を追う。

「あれ、ガリを探すんじゃないの？」

「ん？ ああ」

カイムは振り向き、小さく口の端を上げる。

「焦らなくても大丈夫だよ。きっと向こうから動く」

「はあ？」

意味が解らず、混乱した頭で眉を顰める少年に、カイムはもう一度笑つてみせた。

花火が上がる。明るい雨雲の下で白い煙がはじけると、集まつた人々の波から拍手が広がった。

「あー、あー、メガテス、メガテス」

急いで拵えた舞台の上から、厚紙で作ったメガホンに口を寄せてマーブルが叫ぶ。キリアとカイムは、会場の一一番後ろについた。背の高い青年は問題なく前が見えるが、少年であるキリアはぴょんぴょん飛び跳ねて人ごみの隙間から舞台を垣間見る。副村長の背後には、二人の黒服が控えていた。大勢的好奇の視線を受けても一顧だにしないのは、彼らが半分以上貴族の世界に体を浸しているからだろうか。

「レディースアンド野郎ども、本日はお口柄も良く」
物滅（注釈：十六曜の一つ。物がやたらと壊れる凶日）だぞー、

とマーブルに対して野次が上がる。

「つむせえ唐変木、男なら迷信の一つや二つ根性で乗り越えろや！
という訳で我が村の主人を決める選挙祭、ただ今をもって開始とします！」

わっと歓声、湧き起こる拍手。キリアも飛び跳ねながらぱちぱちと両手を叩くが、隣のカイムは腕を組んだまま黙つて前を見据えている。

「ルールは簡単！ 今からジスティアス様、アルブー様、両領主様に出し物をしてもらいます。それを見て、どちらがより我が村の主に相応しいかを選び、紙に書いて箱に入れます。最後にその数を集計し、より多い方が主となるわけです。ちなみに賄賂も身内票も無しそうことで一つ」

「出し物？ なんか芸人みたい」 キリアが言つと、カイムが「芸人でしょ」と返す。

「お手でもするんじゃない。我輩に命令するんじゃないわん！」とか

言つて。それだけで、眞実を見ようとしない夢みがちな思春期上りの男の票は獲得するだろうね」

「兄ちゃんさあ、意図しないところで命狙われるタイプだよねー」

「……なんで俺が命を狙われた事があるって分かるの?」

「畜生それがボケだと思えない自分と相手の間柄が憎い」

二人の執事にひっぱられて領主達が舞台上に姿を現した。屋台から料理をつまんで咀嚼していた村民達は、初めて目にする主役達の姿に、一瞬の沈黙の後、爆発のような歓声を上げる。

「アルプー様、あんなに素敵な方だったなんて! お優しい上にハンサムだなんて、最高よ!」

「ジスティアス様萌えー! お兄ちゃんつて呼んでください!!」

「アニキと呼ばせて!」

「踏みつけられたい!」

「貢税が下がったお陰で髪も生えてきました」

「ええ尻しとるわい、嫁に欲しいの?」

「お爺ちゃん、それは生垣ですよ」

赤と黒を基調とした男装の小柄な美少女には雄叫びを、乗馬用の軽装をした細身の男性には嬌声を。誰かが太鼓でも鳴らしているかのような高音に、カイムとキリアは思わず耳を塞ぐ。

当の一人は思いもかけない村民達の反応に驚き、硬直したようにその場に佇んでいる。

出し物の必要は無いかもしれないな、とキリアは思った。今この瞬間で、ほぼ全ての人間がどちらに票を入れるかを決めたに違いない。マーブルがメガホンを口に押し当て、大声を張り上げる。

「それでは、まずはアルプー様、どうぞ」

「わ、私か?」アルプーが困惑したまま前に出ると、嬌声は一際大きくなつた。彼は少し考えていたようだが、やがて咳払いをした。

「村民諸君、思うに領地制度とは」

しかし、始まったのが演説だからいけない。誰一人として彼の言葉を理解する事が出来ず、村民はぽかんと口を開けて舞台の上の男

を眺めるだけだった。やがてこっくりこっくり船を漕ぎ始める者や、料理に熱中する者が増え、アルプーが演説を終える頃にはほとんど誰も彼を見ていなかつた。

「……あ、はい、終わりましたか？ お疲れ様です。いやはや大変悲しいお話でしたな、特に主人公の娘がものもらいにかかる所なんて涙なくしては聞けませんでした。それでは、次はジスティアス様、どうぞ！」

「くそつ、これだから愚かな民草は嫌なのだ！」

苛々と踵で地面を打つアルプーに、ジスティアスは鼻で笑つてみせる。「ふん、ろくな教育を受けてない者にあんな話が理解出来るものか。この私ですら途中で寝てちょっと良い夢みてたんだからな！」

「黙れ餓鬼が。十年後を見ていろ、我が領土全てに教育制度を浸透させて立派な学校を沢山作つてやる！」

「ふーんだ私だつてやるもんねーバーカバーカお前の母上化粧濃いー」

「わ、私のママを悪く言うなッ！」

二人の壇上の小競り合いは、例の如く執事達の背後からの一撃で中断するまで続いた。

頭に小さなたんこぶを作つたジスティアスは、舞台の中央に立つと、自信たっぷりに言い放つた。

「歌を歌います！」

そしてこの国に伝わる童謡を一つほど歌つてみせた。それは所々の歌詞が、例えば「青い空」が「蛙の卵」や、「お母さん笑つた」が「姑キレた」といつた間違いを含む拙いものだつたが、細く少女らしい声音にその素人臭さがよく似合つていた。歌い終わつてペコリと頭を下げる時には、主に男性を中心とした熱の籠つた拍手喝采が送られる。

「くそ、よく觀察しているな小娘め、」ジスティアスの自慢げな微笑を受け、アルプーが再び前に立つ。また小難しい話が飛び出すの

かと人々は食べ物に目を落とすのだが、

「これは本当にあつた話だ。ある雨の日の朝、私はふと誰かの声を聞いて目を醒ました。しかし、不思議な事に、部屋を見回しても誰もいない。夢か、と私は再び布団にくるまつて寝返りをうつたのだが、その時、視界の隅で何かが動いた気がした。何気なく私は仰向けになり、天井を見上げたのだ。するとそこに張り付いていたのは

「

思いもよらず始まった怪談に、誰もが顔を青くして領主の姿に釘付けになってしまった。

「……うう、エグい。やっぱり呪われてるんじゃないか、あのおっさん……」

キリアが枝豆を口に挟んだまま、身震いと共に嘆息する。時々悲鳴のようなものが上がるには、舞台袖の方から透き通った少年達が出番を待てないよう顔を出して聴衆を見下ろす所為だろう。

「という訳で、食べ物を粗末にすると怖い目に逢う、という教訓であるな。諸君らもゆめゆめ忘れぬよう」

アルプーがそう締めて終わると、張り詰めていた場の空氣がほつと緩む。曲がりなりにも流石は領主で、教養の無い民草の注目をどうしたら集められるかをジスティアスの下手な歌に見出したのだ。既に聴衆のほとんどは、聞いたこともない貴族の館での怪談に興味津々の様子だった。キリアもまた同様だったので、

「……そう言えば何度か、晩御飯を盛大に残した夜に枕元に立つた気が」

という隣の青年の咳きに耳を塞いだ。

その後の選挙演説は実にバラエティに富み、ジスティアスが逆立ちをしてヘソを出せばアルプーが弓術を披露するといった調子で、まさに熾烈を極めた。やがて太陽が斜めに傾いた頃、マーブルから人々にさらの紙片が配布される。

「我らが領主にジスティアス様が相応しいと思つたら丸を、アルプー様が相応しいと思つたらバツを書いて、舞台の前の箱に入れるよ

うに。自分の名前は書かなくてよろしい！」

副村長の鶴の一聲で、人々は投票箱へと向けてぞろぞろと動き始め、やがて舞台の前は密集する人の波に埋もれてしまう。どちらに入れようかと未だに迷っていたキリアは、紙片も持たずにじっと人の群れを凝視していいるカイムを怪訝に思つた。ふと前方を見ると、舞台の裏側から体を半分突き出して今や遅しとそわそわしている青いスパンコール服の美少年達の姿があつた。

「なあ、あれつて兄ちゃんの召喚冥獸だよな？ 何してんの、あいつら」「カイムは返事をしなかつた。

ただじつと、何かを探すように黒曜石の輝きを放つ瞳を前方に向け不意にはじかれたように背後を振り返つた。

「もう呼んだのか」

「え？」

そして青年は大地を蹴り、舞台を背に蒸し暑い空気を切り裂くよう駆け出す。

「どこ行くんだよ！ 選挙は！？」

「君と逆の人間に入れておいてくれ！」

振り返りもせずに落とす言葉を最後に、カイムの姿はあつという間に道の果てへと消えてしまった。キリアも彼を追いたかったが、その俊足に勝つ自信が無かつたので、諦めて二つの紙片に視線を落とす。

ジスティアスか、アルプー。

どちらに入れようかと暫く懊惱していたが、やがて「あ」と手を叩く。

「兄ちゃんとオレで逆の人間に入れるなら、一枚ずつ丸とバツ書きや良いんじゃん」

キリアの苦悩を見透かした大人の態度なのか、単に面倒臭かつたのか やはりカイムの言葉の根拠には至らなかつた。墨で丸とバツを書き、雨の匂いのする空を見上げる。

舞台の少年達は、さつきより体を表に出して人々を見下ろしていた。

カイムは家々をすり抜け、広い畠や庭を通り抜け、やがて樹が空を覆う小道にまで走り出ると、風の匂いを嗅いだ。

間違いない、『下』の匂いだ。

それはここには不釣合いなほど濃厚で透き通つた、異界の芳香。冥魔術を使う時に僅かに発せられる光と同じ香りだ。カイム以外の誰かがこの香りに気付くかどうかは定かではないが、もしかしたらキリアのように才能のある人間なら判るかもしれない。

あいつから目を離すつもりはなかつたから、これは失態だ。だが、厄介なものを持った訳ではなさそうだった。そもそもここに呼ばれた者は、どんな強大な者でも大人しくなる。陸に上がつた魚のようなんだ、吸う空気が違う。

足が止まつたのは、古い教会の玄関前でだった。

曇天に映える古の建造物を見上げ、眉を顰める。ここは一番最初にガリーナを探しに来た場所で、どの部屋にも彼女は居なかつたことを確認している。だが、芳香はここから漂つていた。そして今や、徐々に薄まりつつある。何者かが発動させた冥魔術は、その執行人と共に既にこの場を後にしているようだつた。

(殺して……無いだろう、な)

不意に想像だにしなかつた不吉な言葉が胸中に湧き上がり、カイムはぞつと体を震わせた。大丈夫、ガリの聖女だ。ジスティアスも逢いたがつていた人間を、殺すはずなどない。大丈夫、大丈夫だ。ほんの数瞬だつたろうその恐怖すべき妄想をかなぐり捨て、カイムは教会の中へと足を踏み入れる。

ざつと見たところは正午に来た時と同じだが、芳香は鼻腔を通して目の奥で静かな色となる。もしも最初に来た時にもつと注意深くしていたら、この色彩にも気付いていたかもしれない。

消えるほどに微かな芳香を、色彩を頼りに、階段を上がる。石の壁は、夏だというのに妙に冷ややかに上階へと誘つた。暗い色の階段が終わつた途端に目に入ったのは、質素な家具と、部屋中に散らばつた色とりどりの布や作りかけの縫い物だった。机の上には日記らしいものが置かれている。きつちり鍵付きになつてゐるあたり、余程ガリーナが見られたくない代物なのだろう。

カイムはガリーナの部屋を見回し、やがてある一点に視軸を置く。今日この部屋に来るのは二度目だ。年頃の少女の家に許可無く上がりこむのも今日二度目。やはりひどく悪いことをしてゐるような気がして、居心地が悪い。冥界の芳香とは違う、どこか芳しい香りが漂つてゐることにも息が詰まりそうになる。きつとガリーナはこの香りにも気付いていないだらう、自分の芳香といつのはとかく気付きにくいものだ。

「ガリーナ」

部屋をゆっくり進み、洋服だんすの前に立つ。樹の幹の色をした取っ手を掴み、静かに力を入れ、呟く。

「開けるよ」

戸を開くと、閉じ込められていた甘い香りの奔流が溢れ出して力イムの顔を撫でた。鮮やかな服の色彩が目に飛び込み、それと同時に董色のものが飛び出し

「もおおおお！！ 遅いです、遅いですー！！ どれだけ待つたと思つてるんですか、カイムさんのノロマさんッ！ 次はカイムさんの番ですからね、まあ早く隠れてください！ 容赦しませんからねすぐ見つけちゃいますからね！ 覚悟してくださいーー！」

洋服だんすから飛び出してきたガリーナは、半泣きでカイムの胸を小突きまわす。そしてすぐに拗ねたように頬を膨らませてそっぽを向いてしまつた。

カイムは唖然としつつも、やがて微笑を浮かべる。

「良かった、元気そうで。どこか痛いところは？ 何もされなかつた？」

「されましたよ。カイムさんにほつたらかしにされました。あんまり長い事たんすの中で座り込んでたから膝とお尻が痛くて」
ぶつと不貞腐れる彼女の言つてこむことの意味はさっぱり判らな
い。

けれど、大体の筋書きは解つた。

「ずっとここに隠れてたんだね？」

「だって移動するとかくれんぼじゃないじゃないですかー！ もう、

しつかりしてくださー！

なるほど、とカイムは頷くと、天井を見上げた。

「かくれんぼ、ね。俺が誘つたんだ?」

「 そりですよ、朝早くにカイムさんがかく

だしつペはカイムさんなんですかね！」

「この真上は鐘楼だね？」

「…………… うへ、わへ、本当にやんと探しにくれたんですか

? すつじく心細かつたんですよ、子供の頃にかくれんぼしてそのまま忘れられて夜まで樹のつるの中でじつとしてた記憶が蘇つて泣きそうについて聞いてくださいーーー！」

鐘楼への梯子を上がり始めたカイムの後ろを、憤慨した董色のガリーナがついてくる。梯子を上りきると、途端に高い灰の空が開けた。この近辺でここまで高い場所は無いだろう、足場は少々狭いが、それを補つて余りあるほどの開放感だった。ちょうど頭の位置に鐘が釣り下がっている。ガリーナは毎日ここで村と空を見下ろしながら、鐘を鳴らしているのだ。

聖女が毎日執り行う神聖な儀式の場に上がりこんだ罪悪感と、ほんの僅かな優越感に、カイムは俯いて地面に膝をついた。

魔方陣や書式を用いて継続的に冥界の力を流用させる魔術（ソルティア式……たゞけか）

残り香はここが最も強い。

例えば、
だ。

この場所に、予め魔方陣を書いた紙を設置し、発動させたまま放

置する。カイムやキリアのそれとは違うこの遣り方は、冥魔術の効果を継続させることが出来るが、つまりそれは、絶える事無く継続的に冥界の力を場に蓄積することができる、ということだ。時間とかけて蓄積された冥界の力はここに溜まり、破裂を待つように膨らみ続ける。後は簡単だ。第一の発動、つまり破裂を促せば、蓄積された冥魔術は完成する。オロー式では不可能な、多量の冥界の力を必要とする魔術には不可欠の儀式だった。

そう、例えば、冥獣の召喚など。

(聖女を媒介にしたつもりか？ けれど、多分それは術者の勘違いだ。この村 자체がそもそも冥界と妙に繋がっている節がある。俺の屋敷の幽霊もその口だから、ここは国のどこよりも冥獣の召喚には最高の環境だ 聖女自身は恐らく召喚に必要無い)

何者かがカイムを騙り、媒介と考える聖女をこの場所に固定させ、召喚の魔術を執行する。

そいつはつい先程第一の発動を実行し、冥獣の召喚を済ませると、早々にこの場を離れた。ここに戻つてくることは絶対に無いだろう。ガリーナが傷つけられるという杞憂は泡沫の如く消え去つたが、カイムはやはり曖昧な笑みで鐘楼の地面に放置された、恐らく紙の重しとして使用された四つの小石を手に取る。

「こちらに召喚された冥獣は無力だ。術者もさつさとこの村を離れる。最早なんの害も無い。だからと言つて、簡単に許してもいいものかな？」

「いいえ、許しません」

上から降つてきた言葉に、カイムは顔を上げた。

相変わらず半泣きの聖女が、木槌片手に青年を見下ろしている。

「さつきから何かいい匂いがします！ 花火もあがつてます！ カイムさん、私をほつたらかしにしてお祭に行つてたんじゃないでしょうね？ ひどすぎます、あんまりです、訴えてやります！」

狭い鐘楼の上ですいすい詰め寄つてくる聖女に身を反らし、カイムは引き攣つた笑みを浮かべた。君にかくれんぼを提案したのは

偽物だよ なんて信じそうにない。そもそもいい歳をした大人が
かくれんぼなんか提案するものか。ガリーナなら、そんな事も疑わ
ずに承諾したのだろうけれど。

翡翠色の強い視線を下から受けたまま、暫くの間の後に、カイム
はもう一度愛想笑いをみせる。
「その服の色、なんていうの？」

ガリーナが木槌を握った手を振り上げると、遠く離れた祭会場
で破滅的音痴な死の楽曲が響いてきたのは、ほとんど同時だった。

キリアはその奔流に木つ端の「」とく飲み込まれる意識で、それが何なのか必死に考えを巡らせた。周囲を見渡せば、皆が皆、同じような苦悶と混乱の表情で耳を押さえていた。まるで雨上がりの川に落ちたような、宵のバーババ亭に潜り込んだような、学問所の成績が悪くてお母さんに叱られている時のような。　ああ、そうか。キリアは瞋目した。今までの自分の認識が引っ繰り返されるような衝撃、人生という名の坂にぽっかり空いた落とし穴、青空に轟く稲妻。

これは、歌だ。

「や　やめる……！　やめてくれッ！」

それが自分の声なのか、隣で蹲る男の声なのか、正面で苦悶の表情を浮かべる女のもののか判らない。判らないが、それでも歌は止まなかつた。変わらぬ歪な波動で恋や愛や渚や星を歌い上げる。そして、何故カイムの呼んだ冥黙がこのような破壊活動を行うのかはついぞ理解出来なかつた。

気持ち良さそうに中空を乱舞する華美な衣装の少年達の向こうで、アルプーらが舞台に倒れている様子が視界に映つた瞬間、キリアの意識はぼやけていった。どうも自分はアルプーが関わると必ず死を感じるなあ、などとぼんやり思いながら　。

その刹那だつた。

濁音の奔流を柔らかく切り裂く、天の響きが舞い降りたのは。少年達は途端に口を噤み、ぴたりと空中で静止したまま、曇天の彼方に佇む尖塔を睨みつける。そして日々に悪態を吐きながら、口惜しそうに唇を噛んだ。

『ああっ、またこのパターン……！』

『なにせ、自棄つぱち系のくせに！』

『空氣読めよ聖女！』

『はいはい撤収、そういう契約だからね。お疲れさん』

鳴り響く鐘の音に対してもう一つ罵りながら、やがて少年達はその体を風に溶かし、広場から跡形も無く消失する。後に残った村人達は、ただただ唖然とするのみで、攻撃された聴覚と脳の感覚を正常に取り戻す頃には、優に教会から救いの主がここに到着するまでの時間が経っていた。

「まあ、やつぱりお祭じやないですかっ！ 皆わんぐつたりするほど踊りまくったんですね、羨ましい」

この惨状を見渡し、腕を組んでじろりと隣のカイムを睨むガリーナ。

じんじんと響く脳髄の振動に揺られながら、キリアは生まれて初めてガリーナに後光が挿しているのが見えた。きっと他の村人達も同様だろう、救世主たる聖女に対して初めて尊敬の念を抱いたようだった。

「ガリ……ありがとう、お前は本当に聖女だった。聖なる女だった。救世主だった。馬鹿にして悪かった、これからはあんまり馬鹿にしないようにするよ」

「へい？」

感動の余り涙を浮かべながらガリーナの手を握るキリアは、次にきつと隣のカイムを睨み、

「一方こつちは悪魔め」

「……ごめん。あいつらの統率を取れなかつたことは反省する。修正しようとよ」

「そうしてくれ悪魔め」

広場の惨状を前に申し訳なさそうに頃垂れるカイムを見て、ガリーナが唇を突き出す。

「なんだかよく分からぬけど、そうです、反省してください。かくれんぼの最中にレディを放つとくなんて失礼です。ところで今回は何のお祭なんですか？ 皆でダンスパーティなんて楽しそうじゃないですか？」

「ああ、そつか、お前はずつと居なかつたもんな。実はさ、今回は

」

キリアが舞台を指し示した時、そこでは丁度、細身の執事が氣絶したアルプーを蹴り起こしている所だった。執事は例の少年たちの大合障の中、素早く耳栓をした後は、騒ぎを無視して黙々と投票結果を集計していたのだ。国内執事番付に上位入賞も決して夢ではない縁の下根性である。

中年の男が呻いて体を起こすその隣では、ジスティアスが未だ蹲つて丸まっていた。

「アルプー様、結果が出ましたよ。とつとど」起床召してください」「む？」うむ、もう朝か。何やら妙な夢をみた気がするが、なかなかスッキリ爽やかな目覚めだ。さて、投票はどうなつた？」

「そうやって厭な事には目を瞑り続けてきた貴方の人生にこれからも幸多からんことを。さあ、ジスティアス様も、もう歌は終わりましたよ」

床の上で小柄な体を丸めているジスティアスは、執事の言葉にも起き上がる素振りを見せない。

執事がうんざりした表情で紙片の束から顔を上げた時、バトラーが舞台の裾から現れた。「どうだつた？」と尋ねる彼の声に、ジスティアスはぱつと飛び起き、きょとんとした顔で大人たちの顔を交互に見上げる。

肩を竦めると、執事は両手に持つた紙片を三人に示して見せた。

「五十一対五十一。真つ一いつですね」

「はあ！？」

アルプーとジスティアスが身を乗り出した。

執事の示す丸とバツの書かれたそれぞれの紙は、確かに丁度五十枚ずつあつた。これではどちらが勝者が決定出来ない。これだけ大騒ぎした挙句に領主を選出することが出来ないなど、とても納得が出来ない一人は、眉を顰めて唸り始めた。

「むう……本当に綺麗に半々だな」

「くそ、まさか勝負がつかないなんて思わなかつたぞ。バトラー、なんとかしろ！」

「知らんです」

「執事、なんとかしろ…」

「わたくしも知らんです」

涼しい顔でそっぽを向く一人の黒服に対し、小娘と中年は歯噛みする。一人の領主はどうしても雌雄を決したい。彼らが、再び活気付いて談笑を始めている村人達を見下ろしながら懊惱している間に、人垣を縫つて少女と青年がやつて來た。

少女は董色の修道服を着て、翡翠色の視線を好奇心に輝かせながら領主達に向いている。青年に先導されて、今回の祭の主役達に会いにやつて來たようだつた。

「だから、今回は祭じやなくて、この村に相応しい領主はこのお一方のうちのどちらかを選ぶものだつたんだよ。君はどう思う？」

カイムがそう言いながらアルプーとジスティアスを示すと、ガリーナは驚いたように目を見開いた。

「あらまあ、そうだつたんですか。でも、そんなの決まつてるじゃないですか」

そう呴いて微笑み、ほんやりと自分達を眺めている領主を指差す。「こちらの方が私の村の領主様でしそう？ とっても良い方なんですよ。私、良く知つてますもん」

カイムはガリーナを呆れたように見つめてから、小さく口の端を上げた。そしてガリーナの白い指が示す先に佇む領主に、「貴方の勝ちですよ、アルプー様」と言つて頭を下げた。

「……えつ、ちょっと、ちょっと待て。なんだお前は？ 投票結果は全部出たんだ、控えていろ！」

慌てて身を乗り出すジスティアスに、カイムは首を振る。

「残念ですが、この村で唯一投票資格があるのに、先ほどは投票が出来なかつた人間がいるんです。それが彼女です。ですから彼女の

今の投票には効力があると思われるのですが、いかがでしょう？」「そんなの納得いかん！ なんでそいつがさつき投票しなかつたなんて言えるんだ？ 証明してみせる、カイムスターン！」

肩をいからせて威嚇するジスティアスの青い瞳は怒りに深く輝き、小麦色の肌は僅かに上気する。彼女が唐突に現れた最後の有権者への不審と不満を顕わにするのは当然のことだった。だが、やはりカイムは静かに頷き、ジスティアスの背後に立つバトラーに視線を移す。

「証明は、そちらのバトラー殿がしていくださると思います」

バトラーは表情を変えず、素早く一度瞬きをしただけだった。そして少しの間を挟んだ後に、カイムを見つめながら、小さく頷く。「確かに、彼女は先ほど投票出来ませんでした」

「そんな……」とジスティアスが柳眉を下げて、唇を噛んだ。

「でも、でも、おかしいじゃないか。さっきは居なかつたと言うなら、どうしてこいつがアルプーだなんて判るんだ？」紹介されるところを叩撃してなくちゃ、こいつがアルプーだと判る人間なんていないだろ！ 例え以前からアルプーの事を知つてたとしても、以前と今じや豚と人間なんだから！」

「いえ、判るんですよ。彼女は

「なんですか！」

「だつて、彼女は ガリーナですから」

何の理由にもならない回答はどこか呆れながら、それでもどこか誇らしげに。

話の展開についていけず、ついていくことをとつぐに放棄しているガリーナは、「えへ」と笑つて首を傾げる。唖然とその董色の少女を眺めるジスティアスが顔を真つ赤にし、再び口を開こうとした時。

「もういいでしょ、お嬢。これは正当な勝敗です。貴方の 我々の負けです」

ぱつりと呟いたバトラーの一言は、あくまでも眠たげで、あくま

でも億劫そうだった。

余興としては面白かつたが、時間の有意義な使い方とは言えなかつた。そんな淡白な声音で、端的な事実を告げる。

だからジスティアスは、ふちんと切れた。

元々保つのも覚束ないか細い絹糸が、呆氣なく風に攪わられて曇天に溶けて消える。

拳を固く握り締め、絶望と怒りを含んだ視線で相手を見上げる。一振りの搖らぎも見せない相手の沈着とした瞳は、ジスティアスの逆鱗を撫でるばかりだった。

「……じゃ、ガリの聖女は、手に入らないのか？」

「へい？ 私が何？」

「ガリの聖女は手に入らないのか！ 私は欲しいと望んだものさえ、手に入れることが出来ないのかッ！」

眉を吊り上げてバトラーに食つて掛かる。

右手は相手の襟首を掴もうとして、それが遙か上空にあるから、胸の前でやるせない拳を作った。

そしてバトラーは、「あんたの望むものとは？」と静かに返した。その瞳は寒空のような冷たささえ帯び、領主の教育者としての厳しい眼光を放っていた。

「はつきり言いましょう、お嬢の我僕にはうんざりです。こんな田舎にまでやつて来て、戦争ギリギリの領土争いをする、村人を翻弄する、アルプー様を挑発する。あんたを守る為に命を賭して警備につく兵達のことを考えたことがありますか？ お嬢の我僕に、彼らは家族に一度と逢えなくなる覚悟をして臨むんですよ。これでも私は精一杯譲歩してあんたの我僕を叶えているつもりです。そうしたら今度は、勝負をして負けたから癪癪ですか。いい加減にしなさい、ジスティアスの跡目ともあろう方が」

氷点下の言葉は少女の熱を冷まし、潮のように血の気を引いてゆく。

逆鱗に触れたかと思えば水をぶっかける相手の態度は何時も通り

で、ジスティアスは何時も通り、そんな彼の一撃手一投足に怒り悲しみ喜び泣くのだ。だって他に上手い反応の仕方を知らない。少女はまだ少女であり、バトラーは何時まで経っても永遠にバトラーなのだから。

だから今、蒼褪め震えるしか術のない少女は、宝玉のような瞳にうつすらと涙を溜めた。呻くように、喉の奥で独り言ひるように、睫毛を震わせ、瞬く。

「家族？ 私は……私は一度と家族には逢えないんだ……そうさせたのはお前じゃないか。我慢くらい、これくらいの我慢くらい、良いじゃないか」

気の毒なほどに血色を無くした小麦色の肌。夏の湿った風に吹かれる帽子の羽飾り。

舞台上の一人の周囲だけ、泡沫のように周囲のざわめきから守られている。

バトラーが僅かに眉根を寄せて口を開こうとした次の瞬間、ジスティアスが唐突に彼の胸元に頭突きをした。ぐ、と青年が呻く隙に、再び顔を真っ赤にした少女が自棄になつて食いかかる。こうやって怒つて喚くか、或いは衆人環視の中で泣き出すしか術が無いのだ。だから領主として、よりみつともなく無い方を選ぶ。

「だつてだつてだつてだつて！ もうすぐ誕生日なのに、お前はなんにも買つてくれないじゃん！ 犬が欲しいと言つたら自分で買え、テストの点数が悪かつたら家庭教師を倍にする、家督を継ぐ者として男物の服、お爺様は私のことを嫌つてる、もう領主なんてやつてられるかばか！ お前なんかどこかの場末の年増な歌姫にうつつをぬかして散々貢いだ拳句に牛乳雑巾のように指先でつままれてポイ捨てされるがいいさ！」

バッチャイよ、と叫んで羽付き帽子を憤懣と共に地面に叩きつける。バトラーは胸を擦つて咳き込みながら、いかにも不満げに返した。

「待ちなさいよお嬢、私は結構理想が高い

「知るか若ハゲ！」

次は手袋を投げ捨てる。

「馬鹿な、見なさいこの豊かな黒髪を。我が領海のワカメは近海随一と評判ですよ」

「お惣菜の話がしたいならお弁当屋さんに行つて帰つてくるな永遠に！ いや構わない、お前がジスティアス家に残れ、私が出る！ もうやだ、私はお寺に帰る！ バカ ！！」

最後は執事の持つていた投票用紙。丸とバツの書かれた紙片が風に舞い上がり、曇り空の元で雪のように舞う中、ジスティアスは舞台を降りて控え室へと駆け込んで行つた。差し当たつての逃げ場がそこしかなかつたからだ。

栗鼠のような素早さでこの場を後にしたジスティアスを、他の人間達は呆然と見送るだけだつた。彼女が怒るしか術が無かつたように、彼らもこうして彼女の後姿を眺めるしか術が無かつた。

「くつ……この私にお惣菜屋に永久就職しろだと？ 入婿はやや不本意だがそれはそれで味のある人生かもしけん……」

未だ咳をしながら呟くバトラーに、アルプーが気まずそうな表情で声をかける。

「まあ、その、なんだ、子供というのは気紛れなもので、自分の視点が狭すぎることにまだ気付かんだよ。一晩寝ればけろりとした顔でまた小生意氣な小娘に戻つているだろう。気を落とすな。正々堂々と戦つて負けたことは決して屈辱ではないことを、いずれあの娘は自ずから知ることになる」

「アルプー様が他人を気遣つてらつしやる。思つた以上に最悪です。見てください肌がこれこのように鳥肉のことく」

「う、うるさい馬鹿執事！ 主人が勝つて領主としての尊厳を取り戻したのだから、もう少し褒めそやしたりおだてたりせんか！」

「わたくしの中でアルプー様の人間としての尊厳は地にへばりついたままですが」

慄懾無礼な執事へ唸り声で反論するアルプーを尻目に、ガリーナがいち早く控え室へと足を向けた。平民は下がつていろ と命じ

るかと思われたバトラーは、沈黙を保つたままその場から動かない。そしてそんな沈黙に対して問い合わせるような瞳を向けられていることに気付いた彼は、カイムに対して弁明するように咳いてみせた。

「構わない。お嬢はガリの聖女に逢いたがっていたからな。少々の時間なら謁見を許そう」

疲弊したように見える相貌は、あるいは本当に疲れていたのかかもしれない。

「バトラー殿、選挙の結果はこれで確定なんですね？」

「そうだろうな、」と嘆息混じりに言う。壁にもたれかかり、村人やアルプーらの騒々しい声を子守唄にするように瞼を閉じると、相変わらず億劫そうに宣言した。

「第一回領主選挙の勝者は、アルプー様だ。この村は以前同様、オルドラン州に属する」

ノックをしても返事が無かつたので、ガリーナは「失礼します」と小さな声で断つてから、そろそろと控え室の中へと足を踏み入れた。中央に置かれたテーブルの上には沢山の菓子が積み上げられ、子供を魅惑する甘い芳香を放っている。

あまり広くない室内を見渡し、探しものが一番隅っこで備品のブランケットを頭から被つて座り込んでいるのを見つけた時、ガリーナは小さく笑つて飴色の菓子をひとつ手に取つた。

そつと少女の隣に座る。相手は何も言わず、膝に顔を埋めたままだつた。

やがてガリーナの事をちらりと一瞥し、鼻をすすつて再び顔を伏せる。彼女に差し出そうとした菓子が宙ぶらりんとなり、ガリーナは仕方なくそれを自分の口に入れた。

ぱりぱりと軽く咀嚼する音だけが響き、それに耐えかねたジスティアスが顔を跳ね上げる。

「……もうッ！ なんなお前！ お前の所為で何もかもパアになつたんだからな！」

「そ、そなんですか？ 「ごめんなさい、そんな事とは露知らず…えっと、ところで、何がパアに」

「もう最悪だ。家出する。決めた。もう絶対帰らない、絶対」

それだけ言うと再度顔を埋めて沈黙する。ガリーナも沈黙を守つた。

暫ぐすると、小さな声でジスティアスが言葉を紡ぎ始めた。

「 私、本当はジスティアス家とは関係ない寺で、孤児として育てられてたんだ」

まるで懺悔の様な告白だった。少なくとも、貴族が平民に打ち明ける類ではない、深い秘密の告白。鬱屈された心情の吐露。「あいつが私を迎えるまで、自分が貴族の血を引いてるなんて知りも

しなかつた。想像出来るか？ それまで泥まみれになつて友達と暴れまわつてたのが、ある日を境に、大理石の宮殿で知識と教養を教えられるようになつたんだ」

ガリーナは黙つて聞いている。相手が言葉を返さないことに安堵したのか、小さく鼻をすすつて、ジスティアスは続けた。

「すごく頑張つてるつもりなんだ、これでも。ジスティアスなんだから、高貴なるものの義務を果たすために一所懸命勉強して、領主らしい人間になつて、みんなの期待に応えなきやつて。でも、でも

。お父様は死んで、お母様も死んで、お爺様は私の事を嫌つて、バトラーは冷血漢で、使用人も兵も口をきくことを許されてなくて、他の貴族達は腹の探りあいばかりで心が狭くて……私、すごく

「すごく 帰りたいんだ」

前領主の祖父は常に彼女を冷徹な瞳で見る。

息子がどこかのつまらない平民の女に産ませた娘。彼の目はそうジスティアスを責めていた。祖父が彼女の名前を呼んだ事は一度だつて無い。どれだけ彼女が努力しても、決して呼ぶ事は無い。お前、娘、あれ。それが祖父にとっての、ジスティアスの名前だった。

それでも、何時かは認めてくれると信じて、不器用なりに努力し続けた。今の今まで。

「……寺にはお前よりもつと暗い色の服を着た教会の先生達がいて、毎日大騒ぎだつたんだ。みんな先生の前では綺麗な言葉を使ってたけど、こつそり影では町の大人の真似をして悪い言葉を使ってみたりした。泥団子を本気で食べて泣いた子もいたし、殴り合つて鼻血を出したこともあつたし、雨がお風呂の代わりにならないか皆で試したこと也有つた。すごく下品で、教養が無くて、品も無くて、貧しい生活だつたけど、楽しかったんだ。毎日が、楽しくて仕方なかつた」

今は決して許されない、失われた理想郷。

富にどれだけの価値があるんだ、とジスティアスは良く考えるようになった。美味しいものが食べられても、楽しくなければ、そこ

に価値は無いのだと。

バトラーは彼女を叱り付ける為の存在だ。自分の仕事を全うする為の対象であり、任務の一環、大事な商品、それが彼にとつてのジスティアス。彼女の気持ちなど、彼にとつてはどうでも良いのだ。強いて言えば文句を言わなくなる様に成長する事が望ましいのだろう。

「館に来てからは、昔の友達皆が私を見るとかしづく。誰もが私をジスティアスとしてしか見てくれない。ジスティアスとしての私でなければ意味が無いから。……誰も私を、本当の名前で……呼んで、くれない……」

そつとガリーナが少女の肩に手を置いた。
びっくりと震えるジスティアスは、視線を隣に向け、吃驚するほど真剣で優しい翠色の瞳と真正面からぶつかる。

そんな事はありません、と少し年上の翠の目の少女が言った。
「貴方はとても素敵な方です。ですから必ず、貴方の事を心から思
い遣つてくれる方がいます。貴方が気付かないだけです」

反射的に肩に乗せられた白い手を払い落とす。

適当な言葉など欲しくない。慰めなどいらない。もう心は決まつ
てる。ぼろぼろになるまで働き続けた心は、もう既に叫んでいる。
「氣休めなんか言うな！ 私の事を何も知らない癖に！ もうイヤ
だ、ジスティアスなんか、生まれた時からジスティアスとしての価
値しか無かつた私なんか、無くなっちゃえば良いんだ！！」

その時、ジスティアスの絶叫の向うで、遠い喧騒を聞いた気がし
た。

喧騒はやがて悲鳴に変わる。その不快な遠い音響にガリーナは眉
を顰め、再びジスティアスの肩に手を置いた。

+

突然悲鳴が上がったのは、祭会場から離れた路の方からだった。

なんだア、とマーブルが不安げな顔で祭会場の舞台下から首を伸ばした時、小鹿のような細い足の少年が文字通り飛んで来た。ガリーナの鐘の音が封じたはずだったから、舞台に立っていたカイムは驚いて少年を見上げる。少年の体は殆ど透明で、消え入る寸前の陽炎のようだった。

何かを伝える為に必死で来た　それは彼の発した第一声で理解出来た。

『自棄つぱち系、臆病者がこっちに来る！　あいつら穴から潜り込んだんだんだ！』

慌てふためきながらもくるくる回転する事を忘れない少年に多少苛立ちながらも、カイムは眉を顰めた。その言葉が信じられなかつたからだ。

「なんだって？　お前らの同族か？」

『そんな訳無いだろ、僕ら臆病者はあんな邪悪じやない！　やばいよ、逃げた方がいい！　沢山の命の匂いを嗅ぎ付けて、嫉妬に狂つてる！！』

「そんな馬鹿な、まさか」

ありえない、と呟き、カイムは色を失くす。

そして唐突にバトラーに歩み寄ると、その襟首を掴み上げ、叫んだ。

「貴方は一体何を召喚したんだ！　何が目的で！」

「……貴族が好む観賞用の無害な小さい冥獣だ、既に捕獲し宿に確保してある。呼んだらすぐ術式は閉じた。私が呼んだのはそれ一匹だ！」

「くそつ」

青年はバトラーを突き放し、唇を噛んだ。祭会場に異様な動搖が駆け抜ける。

何か、良くないものがこちらへやって来る。

不吉な空氣に誰もが顔を見合わせた時、カイムは舞台上から村人達に向けて叫んだ。

「急いでここから逃げて、家から出るな！　冥界の住人が来る！　マーブル、急がせろ！　執事殿、バトラー殿、何でもいいから術を紡ぎ上げろ。あいつの注意をこちらへ向けるんだ！」

一瞬の沈黙が場を支配する。

けれど、それはすぐさま破られた。

会場の入り口に立てられた看板の向つから、黒い何かが顔を出したのだ。黒く大きく、おぞましい何かが。

刹那、全ての村人が悲鳴を上げながら逃げ惑い、そのおぞましいものから離れようと駆け出す。親は子供を抱え、青年は老人の手を引き、顔に恐怖を貼り付けながら、我先にと遁走する。

遠目に、キリアが母親に腕を掴まれて引き摺られて会場を出て行くのが見えた。

蜘蛛の子を散らすような彼らを悠然と眺めながら、その冥界の住人は肢体の全容を現した。

執事がうろんな目でそれを一瞥し、ぽつりと呟く。

「あれは何ですか、カイムスターん殿。貴方はあれと戦った事があるのですか？」

「そんな訳あるもんですか！　冥界にしか居ない連中ですよ。だからこれが初戦です」

やつぱり我々は戦うのか、と呻くバトラーを睥睨し、カイムはやつて来た敵に視線を戻した。

頬に空からの水滴が落ちた。

「あいつは冥界の幽霊、何一つ益の無い害虫のようなものです。冥界と人界は自由に行き来が出来ないから、普通は冥界からこっちには来ない。ただし、召喚魔術などで冥獣を召喚した際、それにくつづいてやつて来る事も無くは無いと聞きました」

「……私の所為か」

「今はどうでもいい。あいつを倒す事に集中してください。あいつは弱い者を食いたがる」

大人の頭程もある背丈、一トーマス程の胸。手足は多く、その長

さがどれも均一ではない。曲がっていたり、伸びていたり、途切れたり。漆黒の身体はまるで汚泥のように濁っている。腐った川魚の鱗のようだ。

それは、狂った巨大な飛蝗のような姿をしていた。

「冥府の星に還る勇氣の無い、ナーバスネリイ臆病者ナーバスネリイ。とかく命に嫉妬しているあの害虫を、ヒトに殺せるかどうかは」

分かりませんけど。

最後の一言は余計だつたかもしない。執事とバトラーは顔を見合させ、視線で共闘を約束する。勝負事にするにしては、どうも生命が脅かされそうな気がしたからだ。

そして、間も無くそれは確信に変わる。

「何だあれは！ 新種の虫か！？」

「話聞いてましたか、アルプー様」

「いいや！」

執事は今回ばかりは主人を蹴り倒さなかつた。残念ながら、それどころではない。

巨大な黒い飛蝗のようなそれは、粘着質な粘土で出来たような足を蠹かせながら祭会場へと這い入つて來た。それは余りに禍々しい姿だった。例えば古い墓を百掘り返して出てきた物を繋ぎ合わせたような、百年の妬み怨みを捏ね上げたような この村には不釣合いな生物だった。否、代物だった。

それに命が備わっていない事は、誰もが直感的に理解出来た。

飛蝗がテーブルを薙ぎ倒し、皿を破壊しながら、逃げ惑う人を追う。まるで自分に備わらないものを求め、相手から奪い取ろうとするかのように。冥魔術遣い達はまだ魔術を編み上げている。そしてナーバスネリイは一番間近に居た老人に向けて歪な腕を伸ばし、掴み取ろうとして 銀の矢に射抜かれた。

アルプーは銀と青玉でつくられた弓を番え、唾棄するように叫

んだ。

「貴様、我が領土の資源を何と心得る！ 公共の物を破壊するなど不届き千万、神が許してもこの領主アルプーの財布の紐が許さん！」 続けて一矢、もう一矢。煌く矢は一筋の光芒となつて、降り始めた雨の合間に縫い、冥界の飛蝗の体に突き刺さる。しかしナーバスネリイはそれに対し、アルプーに一警を投げただけだつた。

「ちつ、30万の損失だ……いや、これで40万！ 幾らでもくれてやるわ略奪者め！」

四本目の矢が飛蝗の頭部に突き刺さり、ついに敵は完全にアルプーへと興味を移す。腰を抜かし動けない老人を捨て、黒い頭部を領主へと向ける。秋の収穫を待つ赤豆がその莢を割つて体を覗かせるように、十数個の赤い眼が頭皮を剥いて現れた。

次の瞬間、凄まじい速さで舞台目掛けて駆け出す。それは誰もが怯む程の、まるで空を滑る燕のような速さだつた。

その巨体がアルプーに激突する直前、カイムの風の魔術が発生し、執事の氷の壁が生まれる。

突風がナーバスネリイの体を押し返し、突進の軌道が逸れる。その先で執事の作り出した大きな鏡台のような氷に激突し、氷の塊ごと舞台の脇へと吹き飛んだ。

一人の攻撃をともに受けたナーバスネリイは壁をも突き破り、大きな地響きと共に姿を消す。

「お嬢ツ！！」

その先が控え室である事に気付き、バトラーが血相を変えて飛び出した。

四人が控え室の中へ踏み込むのと、少女の悲鳴が上るのは、殆ど同時だつた。

控え室の薄い壁は吹つ飛び、隕石が墜落したような様相を呈している。その最奥で、ガリーナとジスティアスが怯えたように小さくなつて飛蝗と直面していた。聖女は領主を守るように抱きかかえ、必死で相手の沢山の瞳を睨みつける。弱みを見せたら負けだと言わ

んばかりの気迫だったが、ナーバスネリイには効くはずも無かつた。

「貴様、我が領土の特産品までも手にかける気かッ！」

「止しなさいアルプレー様、彼女達に当たつたらどうするつもりなんです！ わたくしが呼ぶまで引っ込んでなさい！」

真っ赤な顔で弓を番えなおすアルプレーを外へ蹴り出す執事。

その合間にもカイムが風の魔術で攻撃をするが、直線上に少女達がいる為、全力で撃てない。相手の足の一本を引き千切る程度で、彼の風は消えていった。飛蝗は背後からの攻撃には全く関心を示さず、二人の少女に向かつて手を伸ばす。

少女の命を、奪う為に。

「くそ、タイマンだつたら勝てるのに……！」

村を吹つ飛ばす程の嵐を巻き起こす事など、カイムにとっては容易い事だつた。しかし、彼は戦い方について殆ど全くと言って良いほど無知だつた。状況に最も適した戦法を習得していない。それくらい簡単に、単純に、これまで冥魔術を使つていた。

「母さんに教わつておけばよかつた、」と呻きながら、手近にあつた椅子を掴み上げてナーバスネリイの体に打ち付ける。人間を殴つたような感触が掌に伝わり、椅子が半壊した。その傷痕からは黒い泥が溢れるが、それで終わりだつた。微々たるダメージも与えていないようだつた。

「なんですか、この変な方は！ 変態さんですか！」

ガリーナがジスティアスを抱えてじりじりと壁沿いを移動しながら、掠れた声で叫ぶ。ジスティアスは声も出ない。ただその大きな青い瞳を見開き、相手の発する赤い複数の光を映している。

執事の氷の飛礫がナーバスネリイの腹部を襲い、その肉のようなものを抉り取る。どぼどぼと泥水が溢れ出し、やがて止まった。執事が珍しく眉を顰める。「執事としての自信が無くなりますね、全

く――

その時、バトラーがカイムの腕を掴み、小さな紙を差し出した。親指の先を千切り、その血で描かれたゾルニア式の魔方陣だ。

「これで武器を包め、強度が倍増する。頼んだぞ」

そう言つや否や、ナーバスネリイの脇をすり抜けて少女達の元へと駆け出す。

「バトラーーー！」

手を差し出すジスティアスの悲痛な叫び声。それが消える直前、飛蝗の足が跳ねた。ばねの様に斜め上へと振り切った腕はバトラーの胸を捕らえ、彼の指先がジスティアスに届く前に凄まじい勢いで後方へと弾き返される。

カイムは新たな椅子を持ち、その足を魔方陣の紙で包んで、敵への殴打を再開する。視界の隅で横臥したバトラーが血を吐くのが見えた。

畜生、何て無力なんだ、俺は！！

一本目の足を潰した所で、必死に目を凝らす。香りを凝視する。鼻腔から侵入し、眼窩の底に沈殿する相手の色を見定めようとする。

駄目だ。見えない。何も解らない！

雨が激しさを増す。屋根から零れる雨水が体を濡らす。絶望に体を蝕まれながら、ただ彼は、黒い醜悪な冥界の飛蝗が少女達へとジスティアスへと手を伸ばすのを見た。

悲鳴を上げながらその腕へと十連撃を繰り出すガリーナを撥ね退け、ついに漆黒の腕はジスティアスを捕らえる。

「離せッ！ 離せよ、やだあああーー！」

泣き叫ぶ少女。

降り注ぐ豪雨。

目を据わらせて前へ出る執事。

絶望する自分。

「なんですか……」

床に倒れたガリーナが、頬を涙で濡らしながらナーバスネリイを見上げる。

「なんでこの人、黒いのに、赤いのに、こんなに白いんですか！？」
え。

カイムは椅子を振り上げたまま手を止めた。

驚愕の相貌でガリーナを見下ろす。なんでこんなに、白い？

見えるのか？

この少女には、色が見えるのか！？

「合障団！！」

空中に向けて叫ぶ。

見えるのだ、この少女には。何故ならば彼女は、聖女だから。ヒトでは無い存在だから。

怯えた表情で天井から顔を出す毛深い顔の少年へ向けて、カイムは確信に満ちた怒号を発した。

「キリアを呼べ！！」

漆黒に飲まれながら、ジスティアスは心の隅に安堵感が広がる事にぼんやりと疑問を覚えた。友達が欲しくて、話し相手が欲しくて、似た立場の子に逢いたくて、そしてあの派手な髪色の迷子が身振り手振りで語った聖女の話がとても面白くて、聖女自身に興味が湧いてでも他人の領土にのこのこ直接逢いに行つたらバトラーに叱られるから、領地争いに乗じて聖女ごと手に入れようとして。その為にこんな辺鄙な村まで来て、結局領土も手に入れられず聖女にも逢えず、そして命を失おうとしている。

こんな無駄死に、滅多に無い。

それなのに、何故こんなにもほつとをしているんだろう？

(終われるからかなあ)

多分、全ての願いや望み、苦しみや悲しみが命に確執しているからだ。

逢いたい、逢えない、帰りたい、帰れない、寂しい、辛い、愛されたい、愛されない。

死んでしまえば、楽しい想いを失う代わりに、それらの苦痛を手放す事が出来る。どうせ富にあかせて幸福を売った貴族の生活など、価値は無いのだ。今ここで手放した処で惜しくは無い。

だから安堵があるので、全ておしまいに出来るといつ、とてつもない安堵が。

(ああ、疲れた。ほんと疲れた。毎日絵を描いて歌を歌つて新しい機械の事を考えたかつた。領主なんて厭で厭で仕方なかつた) でも、今ここで死んじゃつたら、バトラーがお祖父様に物凄く叱られるかな。ちょっとだけ悪い事したかな。

それでも終焉の安息の前では、小さな罪悪感など消えてしまつ。闇はどんどん深くなつてゆく。ジスティアスは緩く目を閉じて、沈み込むように落ちていつた。

その、浮遊する落下の狭間で。

ふと小さな灯火のように、心に思い点いた事があった。

(……あれ?)

薄く目を開けようとする。けれどもう無理だった。
(厭だつて事は毎日バトラーに言つてたけど、私が本当にしたい事
つて、ちゃんと言つた事あつたつけ?)

ふつと灯火が消えた。

+

どうしてこんな事になつた、とバトラーは絶望と酸欠で茫洋とする頭で考えた。

お嬢の我儘はいつも事だ。あれが厭だ、これが厭だ、かと思えば良い事を思いついたと言つて突飛な行動をする。大抵はそれが領主としての行いに相応しくないものだから、自然と否定し諫める事が多い。それが彼女の不満になつていることは知つてゐる。

だが、彼女が本当に求めている望みというものが、どうしても解らない。

寺に帰るのは無理だ。既に彼女は領主ジスティアスなのだから。勉強をしないのも無理だ。既に彼女は領主ジスティアスなのだから。

ら。

教育係として叱ると、彼女はいつも不貞腐れて口を噤む。涙目で喚ぐ。今日ほど激しく激昂したのは初めてだ。恐らく、ずっと鬱積していたものが噴出したのだろう。身の丈に合わない事を強制される苦しみは、自分も良く理解している。理解しているはずなのに。

くそ、私の所為だ。何もかも、最初から!

少し前に、ペットが欲しいと珍しく建設的な望みを言つた事がある。誕生日にペットが欲しいと。犬でも猫でも鳥でもなんでもいいと。

部下であるバトラーから主である領主に對して贈り物など有り得ない。誕生日のプレゼントという風習は、同じ立場の者同士、或いは位の高いものが気紛れに位の低いものに下賜するものだ。そう言うと、また不貞腐れて口を噤んだ。

けれど、その時氣付いた。彼女はどうしようもなく寂しいのだと。バトラー以外の誰かを求めているのだと。一緒にいて、話をしてくれる誰かを。

私では無理だ、そう氣付いたから、今度の誕生日にプレゼントをやる事にした。ひどく例外的な事柄だけれども。バトラーが上の者に贈るのだから、せめて貴重なものでなくては外に對して格好がつかない。何事も恥と外聞を気にする世界だから、気にしすぎて損をする事は無い。

だから、ジスティアスがこの村を領土にすると言つて来たがった時、内心では千載一遇の機会だと思った。この村は、最も冥界に近いと冥魔術遣い仲間から聞いたことがあった。眉唾の聖女もどうやら嘘ではないらしい、冥獸を召喚するには一番良い場所なんじやないか、と。冥獸。存在すらあやふやで、召喚さえ困難な貴重な獣。知性を持ち、人語を解する、この世界にはいない獣。

これ以上のペツトは無いと思つた。

だから今朝は先遣隊として日の昇る前から一人でこちらに来て、聖女を召喚の媒介にする為に教会へ來た。もし伝説が本当なら、冥界から人界へ直接魔術を干渉させるより、緩衝材としての聖女を間に置いたほうが遙かに楽になると考えたからだつたが、正にその通りだつた。幻惑の魔術符を懷に装備したら、彼女はバトラーを友人だと思い込んだ。少々奇天烈な会話を交わし、数時間その場から動かない約束を取り付け、彼女の真上にあたる教会の鐘楼に召喚の魔方陣を敷く。

そして召喚に成功したのがつい先程だつた。

現れた冥獸は、自分の感覺からみたらどうとも言えないが、独特の感性を持つ彼女からしたら愛らしいものに見えるだろう獣だつた。

大人しく、賢く、ペットになれと言つたらいと答える、従順な獣を籠に入れ、部屋に置いて来た。

後は適当なところでジスティアスを諫め、さっさと引き上げれば全部終わりだつた。全て滞りなく終わるはずだつた。

それなのに。

(全部、私の所為だ)

この歪な臆病者ナーバスネリイも、彼女の激怒も、彼女の涙も、彼女の死も。何もかも、自分の所為なのだ。

嘔を吐き続ける、残酷で愚かな人間の所為。

ああ、と息が漏れた。錆びの味がする。錆びの匂いがする。ぼんやりと浮上する意識の中、痛む身体を叱咤して立ち上がる。そうだ、身体に鞭打て。痛めつける。それでも終わらせるな。終わらせてはならない。

それが、罪を背負う者としての、絶対の決意の証であり、義務だ。

+

「ジスティアス様！」

叫んだのは、カイムか、執事か、それとも悲鳴の聞き違えか。ぐつたりと氣を失った少女の体を抱え込んだナーバスネリイは、頭を擡げて半身を起こした。そして頭から胸郭であつただろいはずの曲線をじごじごと泡立て、底なし沼のような口を広げる。

生あるものへの嫉妬に狂つた冥界の幽霊は、少女の命を喰らいつもりだつた。

「止めさせろ、彼女が殺される！」

魔術によつて強化された椅子は鉄塊のように飛蝗の足を弾き飛ばしてゆく。絶え間ない執事の冥魔術も、その凍てつく刃で体を切り刻んでゆく。

だが、飛蝗の動きは止まらなかつた。痛みなど端から消失した身体、とうに尽きた命への凄まじい執着心、それがナーバスネリイの

全てだつた。

執事が鼻腔から血を流した。もう限界が近い。余りに魔術を撃ちすぎた。さすがの執事でも、これ以上魔術を使えば死んでしまうだろつ。

「キリアはまだか！ 早くしろ、耽美野郎 ！！」

前に回りこみ、ジスティアスを捕らえた腕を叩き折ろうとして、別の足に蹴飛ばされる。カイムは壁に背中を撃ちつけ、恨みがましく敵を睨みつけた。

飛蝗が沢山の赤い眼で笑つた気がした。

大きな漆黒の体で彼女を取り込み、そして「ごぼりと口を閉じ、喰つた。

終わりだ。

だがその寸前、まだ外界に残っていた彼女の小麦色の細い手を掴んだ者が居た。

「バトラー殿！」

シャツを真っ赤に染めたバトラーが、刃のような瞳で敵を凝視している。掴んだジスティアスの左手の甲に、右手の親指で素早く血色の魔方陣を描く。それは、カイムに渡した紙に描かれていたものと同じ図柄だつた。

強度が倍増。

しかも施術者が直接手で触れて力を注いでいる為、倍の倍ほどにはなるかもしねりない。

喰われたジスティアスの延命には最適の処置だつた。しかし、「離せ、バトラー殿！ 今日何回大きな魔術を遣つた？ 間違いなく、もうすぐあんたは死ぬぞ！」

咳き込むように口蓋と鼻腔から血を吐き出し、膝を地面につくバトラーは、虚ろに笑つた。

「勿論、だが私が死ぬのは彼女を救つた後だ。早いところいつを殺してくれ」

「その通り。曲りなりにも執事の端くれを名乗るなら死んでも離す

ものではありません。多少、見直しました」

自分の鼻血を拭き取りながら、執事が微笑む。すぐに魔術を編み上げ、敵の体を潰す為に氷を撃つ。

手に入れた命を上手く喰えずには業を煮やした冥界の幽靈が、もがくように蠢き、バトラーの体を打ち据える。足の数が減つたとは言え、今の瀕死の彼には確実な追い討ちだった。

「大丈夫です、必ずひっぱり出してみせます！」

バトラーを庇う様に彼の体に抱きつき、ガリーナがジスティアスの手を取つた。脱力しただけ摑むだけの彼の代わりに、少女を懸命に引き摺り出そうとする。ばしん、ばしん、と弱つた足が彼女の体を打つた。その一つ一つを椅子で潰しながら、カイムは地面を見、愕然とした。

腹の下のほうから、『じぼ』じぼと泥が溢れ出し、新たな足を形成している。あれだけ潰したのに、また新たに生まれようとしているのだ。

畜生、どう足搔いても殺せないじゃないか！

唇を噛んで、自分の無力さ加減に再び絶望した、その時。

「なんだよ、こいつ……」

待ち望んでいた声が聞こえてきた。

「キリア！」

耽美少年に連れてこられたキリアが、愕然とした面持ちで控え室内の惨状を凝視している。体は濡れ、寒さの為か、恐怖の為か、がくがくと四肢を震わせている。

キリア、とカイムが声を張り上げた。雨に掻き消されないように、明快に、確實に、キリアに伝わるようにな。

「キリア、こいつは『白』だ。そして君は『金』。ルールがある、君なら知ってるだろ？ ある色はある色に弱い。こいつの白を打ち負かす可能性があるのは、この村では君の金だけなんだ！」

「ちょっと、待ってくれよ。なんだよ、色って、何の事だよ。俺にこいつを倒せってのかよ！ 無茶だ、出来るはずない！」

「出来る！ やるんだ！」

出来ねえよ、とキリアは泣きそうな顔で地団太を踏んだ。知己の変わり果てた傷だらけの姿に怯え、竦んでしまったのだ。たつた十歳に、突然化け物と戦えと言つてもとても無理な相談だろつ。ライムは臍を噛んだ。

「なあ、俺の力、知ってるだろ。せいぜい石飛磯を投げる程度なんだ。兄ちゃんがそいやつて椅子で殴るほうが絶対に強い。それに」

血を吹くまで冥魔術を撃つ執事を見て、「無理だよ。絶対に出来ない。俺には倒せない。」

「ほーほー、とナーバスネリイが蠢いた。ガリーナが腕」と引っ張られ、悲鳴を上げる。ぐつたりとしたバトラーは指一本も動かさない。

足が完全に再生するまで、暇は殆ど無いだろつ。

「キリア」

今にも泣き出しそうな顔のキリアに向けて、ガリーナが言つ。顔は飛蝗の陰になつて見えない。

「出来ます」

「むちやくぢや言つた、俺の冥魔術なんて何も知らない癖に！ 無理なものは無理なんだよ！」

「知っています。私は、キリアがこの変態さんを倒す事が出来るのを、ちゃんと知っています」

キリアが顔を朱に染めた。水滴がとめどなく頭から頸へと落ちる。恐怖の代わりに、理不尽な怒りが沸いてきた。大人なんだから、子供に押し付けるんじゃねえよ そう叫ぼうとした時だった。

「剣です」

「……え？」

「貴方は、冥魔術で作った剣を使って、ぱつたり斬ります。絶対に出来ます。ちゃんと知ってるんです、私は」

「お前、いい加減に……！」

剣？

冥魔術で作った、剣？

そんなもの聞いたことも無い。けれど、例えば全ての属性持ちが、剣を作るとして。最も相応しいのは俺だ。金である俺。

胸元をまさぐる。ノミが出てきた。短刀に近い長さの、ジスティアスに放り投げられたノミ。

「キリア、これでそれを」

カイムが水で濡れた魔方陣の紙を寄越した。キリアはそれをおずおずとノミに巻き、片手で構える。

じつと見つめると、普段の倍の力が湧いてくるのが解った。ゾルニア式はオロー式を補助する。教科書の文面が脳裏に浮かんだ。少年は手足の震えを止め、その場に居る大人達に視線を巡らせた。椅子で化け物を殴打するカイムスター、鼻血を出しながら氷を撃つ執事、ぐつたりしたバトラー、それを庇うガリーナ、化け物の中から伸びる小麦色の手。

「分かったよ」

今、自分がやらなければ、皆が死ぬ。分かったよ。やってやる、やってみせる。

すっと目を閉じ、ノミを握った右手を前に突き出す。脳裏に金色の煌きが瞬き、舞い降りる雪のように一面に広がる。その輝きを少しづつ集め、一本の細長い糸へと繕り集める。ガリーナの紡ぎ糸のように。

そしてこの世で一番、この場この時自分が発するに相応しい、冴えた呪文を探す。

目を開き、キリアは黒い歪な泥の化け物に向かつて駆け出した。とん、と左足を軸に宙に飛び出すと、驚くほど高く舞い上がる。カイムが風で補助してくれたのだ。

そしてノミを下に向けて振り下ろしながら、咆哮した。

「大人は皆勝手だ ッ！」

眩い金色の光が弾け、金剛石に似た冥魔術の剣が、泥水の飛蝗を

回断する。

突然、落下が止まつた。乱暴な力で腕を掴まれる。引き摺り上げようとするその無粋な手を払いのけようとしても、手はジスティアスを逃そうとしない。

（なんだよ、私はもう落ちるんだ。そつとしといてくれ！）
苛立ち、噛み付いてやろうかと思つた時に、微かな声が聞こえた。

ウナ
行かなでく
あてんだ

（……え？）

急激に光が広がつた。

+

それはまるで、黄昏に去り行く夕陽を見送る儀式のようだつた。
この世界に居てはならない存在は、キリアの剣を受け、全身を蠕動させた。真つ一つに斬られた体は戦慄き、震え、声にならない無念の絶叫を上げ、そして金色の光を放つて宙へと溶けていった。後には夏の夕立と、傷ついた四人の大人と、一人の子供だけが残つた。

「や、つた……？」

キリアが呆然と呟く。カン、と硬い音を立ててノミが地面に落ち

た。

「ああ、やつたんだよ。君が倒したんだ。冥界の化け物を！」

料理人が椅子を放り投げ、キリアに駆け寄る。少年の両頬を掴み、その額にキスをした。そして振り返り、柔らかくなつた兩音に曝される四人に視線を戻した。

ジスティアスは地面に蹲つて丸くなり、バトラーは仰向けて倒れている。

ガリーナが少女の背中に触れ、カイムに向けて嬉しそうに顔を綻ばせた。

「大丈夫です、怪我は無さそうです。ちゃんと息もします！」

「ああ」

良かつた、とカイムが息を吐く。けれど、冷たい声音がその安堵を打ち破った。「右腕は、もう使えませんね」

執事がバトラーの傍に膝をつき、無感動に呟いたのだ。カイムは慌ててバトラーの腕を見る。

未だジスティアスの細い手を握っている彼の右手は、真っ黒に変色していた。ナーバスネリイと似た泥のような漆黒。腐り落ちたのだ。ジスティアスが受けるはずだった攻撃を防ぐ代わりに、その力が彼の方へと逆流した。ぐずぐずと崩れ落ちてゆく右手に、カイムは唇を噛んだ。

「……お嬢」

バトラーが微かに唇を動かす。

その瞬間、丸くなつていたジスティアスがぱつと飛び起き、寝起きのように腫れぼつた目で周囲を見回した。そして目の前で倒れている青年と、自分の左手の先に繋がれた彼の腕を見て、息を飲む。

「お嬢、怪我は？」

「え……、無い、無いよ。ねえ、バトラー、黙つて。血が、手が」

「どうなつて、いますか？」

ジスティアスはしゃくり上げる。相手の手を握ろうとして、そしてそうする事で黒い手が崩れる事を知つて、涙を零す。

「……死んじやうよ……」

構わない、と青年は呟いたようだつた。

最期にあんたを守れたなら、それで十分だ。

「嫌だ！」

少女が絶叫する。止んだ夕立の代わりに、雨を降らせるように、

ぼたぼたと泪の零を落としながら。

行くな。終わるな。

それは彼女に常に与えられ続けた楔。それを与えた男は、全てを置いて独りで逝くつもりだつた。

そんな勝手なこと、絶対に許さない。

「私を二度もここに連れて来たのは、お前じやないか！ 責任とれ、逃げるな！ ずっと私の傍にいろ！ 私を誰だと思ってる、領主の命令だぞ！」

バトラーは目を伏せたまま、僅かに顔を歪ませた。微笑むように、苦悩するように、泣き喚く少女の言葉に息を吐く。手首から下が崩れて床に落ちた。命の灯火を翳るように。

「どうしてください、ジスティアス様。その人を助ける」

何時の間にか少女の後ろに立っていたカイムが、無感情な言葉を落とす。その瞳は決意の黒い光に満ちていた。

少女は料理人を見上げ、そして頬を拭いながらバトラーから離れた。震える肩を抱き、所在無げに呆然と佇む。カイムは瀕死の青年の耳元に唇を寄せると、彼にしか聞こえない、それでいて毅然とした響きで囁いた。

「貴方に治癒の呪いを与える。その代償は、貴方が幸の象徴であると無意識下で考えるもの」

そして少し目を閉じ、微かに首を振る。

「貴方は彼女に、真実を話してはならない。その代わり、今は死を免れる事が出来る。良いですか？」

バトラーは今度こそ口を三日月に形作つた。

残酷だな。元よりそのつもりだったが、確実に逃げ道が無くなるじゃないか。

「やさしい、呪いだな」

「そもそも言えませんよ。解つてゐるでしょう」

「ああ、解つてゐとも。

「……お嬢を」

言えなくなる前に、言っておかなければならぬ事がある。全てではない。ほんの一歩を。

カイムが頷くと、ジスティアスがバトラーを覗き込んできた。大きな目は涙で潤んでいる。顔をくしゃくしゃにして、青年の額に指先を触れた。冷えた体に、小さな温点が暖かい。その温もりを頼りに、青年は目を開いた。鉄のように重い瞼は、まるで錠前の落ちた門扉のようだ。

「ウルナ」

その単語に驚いたように目を丸くする少女は、やがておずおずと頷いて返す。

「私を、許して欲しい」

「なに、が？」

「私は、あんたが思つている以上に、あんたを大切に想つてているんです。もし、あんたが領主を本当に辞めたいなら、私は全力でそれを叶えたい」

「……どうやって？」

「一番、簡単なのは、権利を委譲するんです。例えば、身内に」「身内って、お祖父様はもうご高齢だよ。他に身内なんて居ない」

ですから、とバトラーは大きく息をつき、掠れ声で続けた。

「私と、結婚するんです。そうすれば、全て、上手くいく。あんたは富だけ得て、義務を放棄することも、出来る」

ジスティアスはじつとバトラーの目を覗き込んでいたが、やがて泣きながらでカイムを見た。

「まずいよ、傷が頭まで届いてるみたいだ。こんな[冗談言つ奴じやなかつたのに」

「ウルナ」

「やだよやだよ、死なないでよー。お前が死んだら我本当に領主辞めるからなー。ちゃんと良い子にするから、元気出してよー。こんなお前なんて、見たくないよ」

べそをかく少女に、バトラーは再び大きく深呼吸すると、薄く目

を閉じた。そして消え入る寝言のように、小さな声で最後にこう言った。「帰つたら、ちゃんと、聞かせて下さい。あんたが心から望む事を」

「カイムスター！」

大丈夫、とカイムは両手を彼の額と胸にあてて呴いた。「眠つただけです。すぐ、治ります」

カイムの手から、黒い螢のよつた光が湧き上がる。光はやがてバラードの全身を包み、土に染み入るように消えていった。後には傷一つ無い青年の眠る姿が現れる。崩れ落ちたはずの黒い腕は、それよりも黒い夜空の光に編み上げられ、再び元の姿を取り戻した。

治癒の呪いが完成したのだ。

「心から望む事、」ジスティアスは深い眠りにつく青年の髪を撫でながら、目をこじごじと擦つた。

おやつをもつと食べたいとか、沢山寝たいとか、絵を描きたいとか、歌を歌いたいとか、帰りたいとか、海に行きたいとか、演劇を見たいとか、名前で呼んで欲しいとか、本名を知りたいとか。でも、とりあえずは。

青空の中の積乱雲を見上げながら、ジスティアスは微かに笑つた。「抱っこして欲しいな。お父さんみたいに。逢つた事ないけど」そしてカイムと目が合い、頬を赤く染めてそっぽを向く。カイムは座り込んだまま微笑んだ。本当は笑う気にすらならなかつたのだけれど。

全く、なんでもつとはつきり言わないんだ？

呪いが発動してしまった後は、チャンスはもう一度とないのに。

どうしようもなく面倒臭い人種だ。

領主という人間は。

貴方は何でも出来るのですね、と執事が呆れ口調で呴くのが聞こえた。そうでもない。何事も結果を得る為には犠牲が必要だ。時に

は、結果すら凌駕するほど、残酷な犠牲を。

+

その日、村は一日中大騒ぎだった。

冥界から見たことも無い獸が（「いや冥界からかどうかはよく解らないけど、というか冥界なんて信じてないし、とりあえず悪い害獸」とその日の村内会書記の日記に記された）やつて来て、村人を襲い始めたのだ。長い村の歴史の中で、こんな凶事は少なくとも文面では記録に残っていない。ところがもっと驚いた事に、この害獸を、二人の領主と聖女が力をあわせて打ち払ったのだ。しかも止めを刺したのは少年キリアであるという。

結局 祭は加速する事になった。

アルプー領主と、隣地のジスティアス領主、そして聖女とキリアに対する第一回感謝祭は、妙な実感を伴いながら先ほどよりも遙かに大きいものとなり、結局なし崩し的に一日連続開催が決定となつた。

主人公である連中は、くたびれ果てて伏せついていた為、出席する事が出来なかつたのだが。

カイムの屋敷である臨時宿屋でじろじろしていた兵達を至急呼び寄せ、領主達を運ばせた後、カイムは愕然と佇む事になる。部屋が無かつたのだ。全て二つの領土の主達ご一行様で満室となり、彼自身の休む部屋がどこにも無い。ロビーも物置も、あぶれた兵が寂しそうに蹲つている。

「どうしよう……どうしてこんな事に……」

改築したばかりの豪奢なステアケースを見上げて途方に暮れた。

今寝ないと流石に死ぬ自信がある。冥魔術も沢山使つた上に、禁忌として自ら封じていた呪いまで使用したのだ。

しかし、あてにしていた九里金豚もバー・ババ亭も大忙しだ。彼の横になる隙などありはしない。屋外も無理だ、先ほどの雨で地面

がぐずついている。参った。絶体絶命だつた。

「あの~」

「うわっ

突然背後から声をかけられ、カイムは飛び上がつた。

振り向くと、董色の聖服を泥まみれにした聖女が、指先をもじもじと弄りながら上目遣いに彼を見上げていた。

「部屋、無いんですね」

「え、ああ……占領されちゃつた」

「ついてきてください」

「え?」

ガリーナはそう言い置くや否や、くるりと踵を返して早足で歩き出す。訳も分からぬまま、カイムは取り敢えず少女を追う事にした。

空はすっかり夏の快晴で、西の方がやや紫色に色付き始めている。ガリーナの服の色彩によく似ている。ぬかるんだ道を音を鳴らして歩き続けると、景色には段々と深い緑が増え、やがて常緑樹の茂る小さな森へと入つた。

「ごめんなさい」

ガリーナが呟いた。カイムは彼女の謝る理由が解らなかつたので、何が、と返す。

「さつきの人、多分冥界から來たんだつて皆言つてます。きっと私の所為です。私がかくれんぼにかまけて、鐘を鳴らすのが遅れたから 私の所為で、皆さんが酷い目に」

「違うよ!」

青年は思わず声を上げる。彼は、ナーバスネリイ襲来の理由を誰にも話していなかつた。バトラーの召喚がきっかけで不運にも奴の侵入を許した所為だが、それを言えばガレナ州領主ジスティアスの責を問われないはずは無い。公表するのが当然の行動なのだが、カイムにはどうしてもそれが出来なかつた。したくなかったのだ。

「君は良くやつてる。あれは本当にアクシデントだったんだ、君の

ミスなんかじゃない。寧ろ、君がいなかつたら倒せなかつたんだ。

君はあいつの星来の色を見抜いたから

「せじらいのいろ? 白の事ですか?」

「そう。普通の人間には見えないはずだ。見る必要が無いから。君のお陰で、白を打ち消す金のキリアを呼べばいいと分かつた。本当に感謝してる」

ガリーナは頬に手を当て、少し俯いた。

「よく、覚えていません……何か変なことを口走つたとは思つたんですけど。でも、皆さん普通に見えるものだと思つていました。世界は色に満ちています」

世界は色に満ちている。

その言葉をヒトから聞くとは思わなかつた。矢張りこの少女は、聖女だ。眉唾でもなく、伝説でもなく、眞実の聖女。例え周囲の誰もが信じていないとしても。

「カイムさんは、黒ですね」

「そうだよ。風の黒」

「執事さんは青で、キリアが黄色で、バトラーさんは……ちょっと見辛いけど、縁かな。不思議です。冥魔術遣いさんは、他の方よりも輝いてます」

それは人界では属性と呼ぶ。金属、風属、水属、火属など、これらは人には決して色で見えるものではないからだ。それを色で識別し、生まれ持つた『星来の色』と呼ぶのは、冥界の者だ。風属を黒と、水属を白と呼ぶのは、この大地の遙か下に棲む者だ。

「カイムさん、普通の人じやないから、そんなに落ち込んでるんですか?」

「

カイムは苦笑した。頬を撫でる古木の葉を一枚、通りすがりに引き千切る。

どうしてこの子には、解るんだろう。

絶対に一度と使うまいと決めていた呪いの冥魔術。人命を助ける

為とは言え、それを使用した事は決して彼の心にとつて易い事ではない。呪いは所詮、人を幸福には出来ないと知っているからだ。だが決定的な不幸にもしない。本当に、忌まわしい力だと思う。

「お揃いですね。私も一応、人じやないって事になつてます。なんせ聖女ですから、えへへ」

何故か嬉しそうに笑いながら、ガリーナは小走りで目の前に現れた建物の扉に手をかけた。それは古い教会、ガリーナの居住の場。本日三度目の再来となつたカイムは、半ば混乱氣味に首を傾げた。皆さんには内緒ですからね、と言つて、ガリーナは扉を勢い良く開けた。そして満面の笑みで両手を広げる。

「お泊まりさん一名様いらっしゃーい！」

……。

「へ？」

族趣味は、今も続いているんですね」

「ああ……ウルナが生きている限り、永遠に」

「俺は最初、貴方が彼女の父親ではないかと思つたんですが、振られた所を見るとそうではありませんね」

「やっぱり振られたのか、私は」

「お気の毒に」

「うるさい」

「すみません」

「……私は、冥魔術に耽つてしまつてね。子供の頃からこれ一筋だつた。召喚も得意だつたし、貴族連中に冥獣をやる事もあつた。とにかく、もつと冥魔術で遊びたかつたし、学びたかつた。その為にはどうしてもロードという身分が邪魔だつた。足枷を嵌められたまま海に放り込まれる氣分だつたよ、当時の私は。　こんなジスティアスの恥曝しは当然ながら勘当状態で、貴族の世界では死んだ事にされていたから、そのまま上手くいくと思った。好きな事だけをやって生きていけると。ところが、父が他に子を作らなかつた故に起きたお家騒動、お前も知つてゐるだろう？　再び私に白羽の矢が立つた。当然だな、実子なのだから。それでもどうしても私は厭だつた。だから、身代わりを立てた」

「世間的に死んだ貴方という立場はそのままで、隠し子がいたというアプローチをしたんですね」

「そうだ。孤児院から何も知らない貧しい子供を引っ張つてきて、立場も富も与えるんだからお互いにとつて悪い話じやないと信じてたんだ。信じられない愚か者だろ？　それが私、アイスグラント＝ガレナ＝ノム＝ジスティアスだ」

「彼女に白羽の矢を立てたのは何故ですか？」

「さあね、良く分からぬ。ただ　教会を覗いた時、まだ幼かつ

た彼女が豪奢な天井を見上げながら、懸命に絵を描いていたんだ。ステンドグラスでも描いているのかと思ったら、彼女は教会の設計図を描いていたんだよ。内側から見上げて、模写するみたいに、建物の設計図を。凄く面白い、と思つた。この子はある種の天才だと。多分それだけの理由だ。次の日、彼女はジスティアス家の嫡子として迎え上げられた。私もそのまま、面白い面白いだけで生きてゆけば良かつたんだがね。父がそれを許さなかつた

「貴方をバトラーとして置いた?」

「そう。父は放任主義だったが、愚か者には制裁を与える。自分をしている事を、しっかりと見据える。そう言いたかったんだろう。言いつけ通り、渋々ながら彼女の教育係になつてしまつた私は、時がたつにつれ自分のした事の恐ろしさにただ怯えるばかりになつた。自分の役目は彼女の厳格な教育係だと信じることで、どうにか平静を保つているがね。これでも毎晩、うまく眠れないんだ。……なあ、想像してみろ」

「……」

「愛する人が、自分の幼かつた欲望の為に人生を狂わされ、何も知らず懸命に役割を果たそうと努力し、それが上手く出来ず苦しむ姿を。そして自分は彼女に憎まれ疎まれる存在だという事を」

「……」

「私がウルナを愛してしまつた事は、利己主義だった過去の私への罰だ」

「執事殿が握っていた貴方の弱みとは、この事だつたんですね」

「あいつは本当に勘のいい人間でな。野心を抱くような人間でなくて助かつていいよ。自分の中の変なポリシーだけに忠実だからな」

「貴方が握っている執事殿の弱みとは?」

「まあ……弱味とも思つてないらしいがな、あいつは。だが取り敢えず、仁義は通す。秘密だ」

「俺の呪いは、矢張り貴方がたを不幸にするだけのようだ。かけるべきじやなかつた」

「いや、構わない。私は一生を以つて償う。それに変わりは無い」「想いを、永遠に伝える事が出来ないとしても？」

「それが私の罰だ。その罰を受け続けながら、バトラーとして、彼女を必ず幸せにしてみせる。勿論、」

いつかウルナの夫になる事を視野に入れながらね。

そう呟いて、眞実の領主は月明かりの下で微笑んだ。

+

昼前の青空に花火が上がる。

帰還する領主達への餞のパフォーマンスだ。一晩寝て、合障団達の密着コンサーートの被害から回復した兵達は、黒塗りの馬車を中心に整然と馬を並べ、出発の準備に余念がない。

お土産に沢山の菓子や果物を抱えたジスティアスは、村人に紛れて「またきてねジスティアス様」と書かれた垂れ幕を持つガリーナの姿を見つけると、笑顔で駆け寄ってきた。赤い羽根つき帽子は、やはり銀髪と青い目に良く似合つ。小麦色の肌にも。

「昨日は大変だったな！ なんだか良くわからなかつたけど、でも皆元気になつたし良しとしよう。村が手に入らなかつたのだけが残念だ」

「また選挙をやればいいじゃないですか。次はもっと前もつて準備して、立派なお祭にしますからね！」

楽しみにしてる、と言つて、ジスティアスはガリーナに顔を近づける。そして小さな声で囁いた。

「あのさ、お前さ、昨日、私の事を思つてくれる人が絶対いるって言つたら？ あれさ、もしかしたら、ほんとにもしかしたら、本当かもしけれない」

「まあ、どうしてですか？」

「あのな。すつごい嫌な奴が、私が前言つた事を覚えてくれてんだ。誕生日プレゼント、くれたんだ。少し早いけど。それがめちゃくちゃ可愛いペットなんだよ」

ガリーナは我が事のように嬉しそうに笑い、頷く。ジステイアスはぴょんぴょん跳ねながら馬車へと戻つて行つた。そして途中でくるりとこちらを振り向き、叫ぶ。「偉い領主になつて、いつかこの村を私のものにするからな！」

「何ツ」

村の女性達から沢山の花を押し付けられて困惑していたアルプーが、歯を剥いて少女を睨んだ。

「お前が偉くなる日なんて一生来るわけ無からうが、この田舎娘！
帰れ帰れ、ばーか！」

「うつさい豚領主！ リバウンド期待してるぞ、ばーか！」

「執事、塩撒いとけ！ 田舎菌がうつるわ、ばーかばーか！」

「砂糖の間違いだろ、ばーかばーかばーか！」

ざばりと頭に塩を降り掛けられ、違う私じやないあつちだ馬鹿執事ツと怒鳴るアルプーを尻目に、ジステイアスは馬車へと乗り込んでいった。

扉を閉めようとするバトラーを制し、周囲を見回す。少し離れたところで、妙にやつれた顔をしているカイムを見つけ、上機嫌に呼びかける。

「カイムスター、お前の冥獣召喚術、大したものだな！ うちの冷血バトラーとは大違ひだ。褒めてつかわす」

「は？」

「ガリの聖女に逢いたいと言つた時、バトラーが特に反対もしなかつたのは、お前という腕の良い召喚冥魔術士がこの村にいることを知つてたからなのだな。お前の親戚の友達の少年達はちょっと、お断りしたいが……だが、あのペットは可愛い。気に入った。大事にするからな」

カイムはぼんやりと相手の顔を凝視し、そして茫洋と彼女の言葉

の意味を理解した。

そういえば、彼女はペット冥獸の召喚が誰によつて行われたものか、見ていないのだ。

見たのは、カイムが少年靈を呼んで言葉を交わした所だけ。青年は困惑に唇の端を上げ、バトラーを見た。相手は一瞬こめかみを引き攣らせ、すぐに青筋を浮かべてカイムを睨む。そして首を横に振り、人差し指を唇に持つてきた。

彼は自分が苦労した事、努力した事を見破られるのが嫌なタイプらしい。耐えて忍ぶ、一昔前の貴族の典型的なプライドの高さだ。ジスティアス一族は悪趣味だが、貴族精神だけは高邁のようだ。

「……お褒めに預かり、光栄です」

「うむ、今度なんかご褒美あげるね。では、帰るぞバトラー！」

はい、とバトラーが呻き、茶色の毛並みの美しい馬に乗ろうとした時、「違う」とジスティアスが憤慨した。馬車の扉を開け、自分の隣の座席を示し、

「お前はこっちー！」

と喰く。

「馬じや寝れないだろ。そんな眠そうな顔して、こっちまで眠くなつてくるよ。辛氣臭いから着くまで静かに寝て！」

「 分かりました」

そして、ガレナ州組一行はゆつくりと村を後にした。

その豪華なシルエットが大通りを抜け、草原へと消えて行つた後、カイムはほつと一息ついた。これでやつと、心置きなく休めるのだ。だがそれも束の間、ガリーナが跳ねるように彼のもとへやって来る。「今日のテーマは豊作過ぎて食卓に居場所の無いホウレン草の困惑です！」

深緑色である。

カイムは少女の元気な笑顔を眺めながら、若いなあ、と心の中で呟いた。未だ頭の中が朦朧としている。一方、彼女は昨夜の興奮が冷めやらない様子だ。

「昨夜、「男性を泊めるのはいけないことなんんですけど、カイムさんなら良いですよね」と照れくさそうに言つたガリーナに、カイムは大いに仰天した。

「ちょっと待て、まだ招かれもされた事の無い関係なんだぞ！それがいきなりお泊まりって、そんな節操の無い！　あ、いやでも待てよ、と言う事は少なくとも自分は執事と同列に扱われたんだ。良かつた、彼女の中で俺は執事より劣る存在では無かつたという事なんだ。つて違う！　益々節操が無い！　何を考えているんだ、この娘は！」

「ガリーナが何を考えてカイムを泊めたかと言えば、勿論。

「昨日の王力一対決は盛り上がりましたねー！　カイムさんが聖なる水切りを唐辛子色の騎士に上乗せして、冥魔術攻撃を防ぎつつ捨て山の中から一枚手札に加えた時には笑っちゃいました。聖なる水切りは大食漢オンドル二世と王族にしか使えないのに。騎士なら同じ効果の黄昏のつけ髪ですよ。うふふ」

「地方ルールなんか知らないよ……」

「駄目ですー カイムさんはもうこの村の一員なんですから、ちゃんと覚えてください。執事さんとお泊まり王力一対決した時、あの方はその辺ちやんと抜かりなくてですね、私四連敗を喫してしまいました。今度は皆でお泊まり王力一合戦しましょうー！　はい、裏山のラグジュアリーを使用出来る人は？」

「怪盗ゴルゴンゾーラ、山田山荘の女傑、英雄トーマス……」

「ひんぼーん！」

「お陰様で一睡も出来ませんでした。」

常に想像の斜め上を突つ走る聖女ガリーナは、その非人情ゆえに毎回空気を読まずカイムを死の縁に立たせる。断れば良いものを、何故か断れず死ぬ手前まで付き合つてしまふ自分も情けない。

通りすがつたキリアが、砂糖菓子を頬張つた所為で聞き取りづらい声をかけた。

「あ、いたいた。なあ兄ちゃん、マーブルが呼んでるぜ。壊した舞

台の控え室をちゃんと直しつけてさ」

ああ、もう。

なんで俺はこんな村に来ちまつたんだ。

倒れる際、非常に良い音を立てて後頭部を大地にぶつけたが、それが良い子守唄になつた。

最後に見た空はまるで宝石のように美しく、ウルナ＝ジスティアスの瞳のようだつた。

+

からからと馬車がゆく。

緑の草原を、雲ひとつ無い蒼穹を、若鳥の群れを横目に見ながら。少女は右手で頬杖をついて窓の外を眺め、息をついた。ガリの聖女には逢うことが出来なかつた。けれど、あの変な女の子とは少しだけ友達になれた気がする。ジスティアス家に来てから、初めて本音を他人に語つた。

それでジスティアスは吹つ切れた。溜まっていた物を全部出したら、暗雲が風で吹き飛ばされるように、空が広がつた。こんなにも広い青が、こんなにも近くにあつたのだ。

「今まで通りで、別に構わないからな」

隣に座つていた青年が視線をこちらに寄越したようだつた。ジスティアスは草原を眺望し続ける。狐の親子が遙か遠くで走つていた。「ちゃんと頑張る。領主になるために生まれたんだから、良い領主になつて、領地を繁栄させる。あの豚には負けない。だから、お前は今まで通りで良い。変わるのは私の方だ」

青年が俯いた。まだ少し、調子が悪いようだつた。昨日あれだけの状態から立ち直つたのだから、具合が良い方がおかしい。

ジスティアスは窓から視線を戻し、相手の目を見ながら、少し緊張した面持ちで続けた。

「いつかちゃんと誰かを愛せて、誰かに愛されるような、そんな人

になりたい。すぐには無理だろうけど、でも私、頑張るよ」相手は何かを言おうと口を開き、そして僅かに眉を顰める。右手を抑え、言葉を喉の奥に押し込む。

ウルナは暫く沈黙を保った。やがて、とても言い辛そうに、先程よりも更に緊張で固くなつた表情を相手に向け、「だから、その代わり、「乾いた小さな声で言う。

その続きを、アイスグラントは黙つて待っていた。

「その代わり、お願ひがあるんだ。あのさ、時々で良いから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129b/>

微瞑むように 【第三話 少女貴族は野望を抱く】

2010年10月8日14時56分発行